俳　句　雑　誌

水　明

２０２２　２月号

令和四年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五巻第二号

《今月のかな女》

枯葎やうやく刈られ春めきし

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

枯葎は、単に枯れた雑草を意味する枯草とは違い、絡み縺れたまま枯れ果てている草のことである。おそらくかな女の住まいの近くにあった空地であろう。地面を覆い尽くした夏の雑草がそのまま秋から冬を迎え、放置されたまま二月になり、やっと刈り取られた。そこを通る度に不快に思っていた空地がすっきりして、春の訪れを感じ取ったかな女であった。季重なりが、季節の移り変わりを然り気無く表現している。（鬼之介・註）

水　明

第1097号

―華の一句―

神の旅お国自慢の土産提げ

菅原卓郎

神々が伊勢大神宮に参集するという神の旅信仰が、近世になって、男女の縁結びの評定をするために全国の神様が出雲へ参集すると云うことになったようだ。日本各地各所の神様が、その地の名産品や名物を出雲大社への土産にして参上するという微笑ましい内容の俳句である。それ等の物品は、近年とみに人気が高いふるさと納税のお返しの品々と一致するかも。

（鬼之介・推薦）

水明

令和４年
２月号

今月のかな女　山本鬼之介　4
華の一句　椎野美代子　6
軍神（作品）　大橋廸代　7
落葉（近詠）　松井由紀子　8
ゴトビキ岩（近詠）　井口俊晴　10
風知草　※雪欄作家近詠鑑賞
硯箱　※季音月評

季音「雪」（同人作品）　吉住光弥　石井喜恵　網野月を　ほか　12
季音「月」（同人作品）　大場順子　松井由紀子　鳥羽和風　ほか　19
季音「花」（同人作品）　近藤徹平　大塚茂子　正木萬蝶　ほか　24

『水明誌』を繙く　竹内宗一郎　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30

作品回顧
華の刻　石井喜恵　34
拈華微笑　大橋廸代　36
六花　菊池ひろこ　38

「水明」年間

山脈縦走　五明　昇　40
余韻　島津初花　42
実千両　星野和葉　44
追憶　松宮保人　46
玉手箱　柚木治子　48

水明集　神田治江　曲淵徹雄　本橋稀香　ほか　51

水明集作品評　山本鬼之介　66
水琴窟（水明集十二月号鑑賞）　池田雅夫　70
山紫集　72
鼓笛集（同人作品）・私の一句　78
俳誌望見　梅澤佐江　32
句集喝采　近藤徹平　50
水明例会報・各地句会報　81・84
新珠賞作品募集　89
春の吟行会のお知らせ　90
水明忌について・一一〇〇号記念作品募集　91
風声・発展基金御礼　92
後記　94

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

軍神

山本鬼之介

威風堂堂大火へ化学消防車

行間の文字を呼び出す冬星座

冬木立その一幹に祖父の厳

借景は天の香具山初写真

軍神の妻の遺影や寒卵

木造母校今は白堊に冬木立

藤田進に似たる師範ぞ寒稽古

フィナーレに踊るワルツよ春を待つ

落葉

椎野　美代子

落葉いろいろ落葉づくしの石燈籠

落葉いろいろ腑抜けてゐたる陶狸

始祖鳥の振りして降りし朴落葉

朴落葉踏めば化石の音がする

柿落葉一葉一葉に風姿あり

乾坤をここに集めて銀杏落葉

銀杏落葉眩しむほどの大往生

我家の多種の植木は五十年を経、それなりの風格を備え四季折々の表情を楽しませる。

落葉の殿は防火を兼ねた銀杏、二階のベランダの高さに止めてあるので厄介ではない。

初学の頃、故紗一、明世、春邑子先生方より「大上段に構えず身近なものを」との御教示を折につけ反芻する。居間より終日眺める庭の景、これこそ身近なもの、散り積む落葉と得心のゆくまで付き合った、落葉づくしの作品となりました。

ゴトビキ岩

大橋廸代

見あげたる龍のうろこの冬の磴

匐ひのぼる百磴（だん）までを顎マスク

木洩れ日に朝熊竜胆咲きそむる

追ひ越さる鈴の冴ゆるや磴半ば

春を待つゴトビキ岩に触れもして

白息や木の根岩根の女坂

一礼し一直線に葱鮪鍋

控柱つきの明神鳥居から見上げると、源頼朝寄進の鎌倉積の石段は、まるで崖同然で、一瞬足がすくむ。だがこれを登らねばゴトビキ岩には会えぬ。勇気を出して杖を選ぶ。

夫は先を、娘はすぐ後を「大丈夫？」の声をしきりに。心臓はばくばく、息は、ぜいぜい、途中、腰を下ろし一服しつつ、五百三十八段を登りきる。

ゴトビキ岩からの眺めは神武天皇降臨の地にふさわしい、渺渺たる群青の能野灘の絶景であった。

風知草

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　松井由紀子

◇月下美人（十一月号）

石井喜恵

月下美人ひと夜飲み干す貴腐ワイン
衣擦れの音は空耳月下美人
優しさも時に疎まし月下美人

貴腐ワイン。衣擦れを配して高貴で嫋やかな女性を想起させる月下美人の姿がくっきりと浮かびます。私も二十年来鉢植えの月下美人と暮らしていますが開花を待つわくわく感、花と過ごす愉悦の数時間は倦きることがありません。香り高く気位も高く花の終りも清らかなエロスを少し堪えてうなだれています。とても魅力的ですね「長恨歌」の中の楊家の美少女（貴妃）のようです。

やはらかき菩薩の伏目月下美人
ひとりでは勿体なき夜月下美人

香りも花も一夜かぎりのもの、それは暁の夢に仄かに見え給うみ仏の微笑みのようです。今までにたった一度早朝に咲いたことがありました。夜明けの光の中で露を含んで神々しい美しさでした。ひとりでは勿体ないと心底思いました。

◇稲つるび（十一月号）

五明　昇

稲妻の寸描美しき余呉の湖
稲妻に素顔をさらす阿修羅像
斬り結ぶ龍虎の像や稲びかり

阿修羅は戦闘神と言われ厳しい面持ち、龍虎は恐ろしい威嚇の形相で対決しています。強いフラッシュのような稲びかりはその闘志をくっきりと浮かびあがらせお句にも緊迫感をもたらしています。余呉の三橋節子美術館を訪ねたことがあります。湖に伝わる子別れの羽衣伝説と幼子を残して早逝した画家の哀切な絶筆画、その日の湖は青く閑かな美しさでした。

稲びかり玻璃戸に動く物の影
稲つるび路傍に古き道祖神

遠雷の放つ光は強弱長短音もなく物の影を誘い出し動かし玻璃戸の向うに不安な気配を漂わせています。山の上に在し

た雷神は一迅の風に乗ってその光を稲田にくまなくひろげます。稲に夫が訪れたと古代の人々は考えたようです。良き首尾を見届け微笑する道祖神が居られます。

◇**紅葉**（十二月号）　　**矢作水尾**

山門を落葉の駈くる禅の寺
孤高の樹のぼりつめたる蔦紅葉
丈高き紅葉の一樹奥の院

導入は淡淡としかし読み手をしっかりとその場に立たせます。晩秋の古刹、葉数も薄く木肌も寂びた老木に艶やかな紅の蔦がからんでしみじみ美しい。紅葉のひともとがある奥の院お寺の格式が句にも品格をもたらしています。どのお句も一流の職人が縫い上げた美しい仕立物を手にするような心地がいたします。

夫の碑へそつと秋思の手を置きぬ
山寺のひと日暮れゆく薄紅葉

穏やかな秋の陽に体温のような温もりのある碑、手を置けばご夫妻には通い合う大切な想いがおありなのでしょう。暮れ方の紅葉は色も薄らぎ空気も冷えはじめます。墓参を毎週されるとか、この様な優しい刻がいつまでも続きますように。

◇**時の町**（十二月号）　　**田寺玲子**

鰡飛ぶや明石の門波かがよへる
子午線の真上をまたぐ秋の虹
天高し汽艇行き交ふ瀬戸の海

輝く海面を勢いよく飛ぶ魚影、子午線上の空高く鮮やかな虹そしてよく晴れて凪いだ海を汽艇が行き交い物流も人流も盛んな明石の海の風景、明るい開放感と活気が伝わってとても気持ちのよいお句と思いました。

夕映えの架橋はるかに鳥渡る
秋ともし海を眼下に時計台

明石の天文科学館は高台にあり時計台は地上五四メートルとのことです。そこからの展望は街、橋、瀬戸内の海を見はるかす絶景に違いなく夕景を遠ざかる渡り鳥の行方も追い続けられそうです。やがて街にも橋にも船にも灯は点り時計台の眼下には秋の夜の澄んだ煌めきがひろがっているのでしょう。

硯箱

◆季音十一月　井口俊晴

良寛の筆の流麗秋の雲　由良ゆら女

芸術の秋。こちらは絵画展、あちらでは書道展、展覧会花盛りである。きょうは江戸時代後期の禅僧・良寛の書に接することが出来た。「良寛」と呼び捨てにすると、ちょっと近寄りがたく感じるけれど、「良寛さま」と呼ぶと、村の子と手鞠をついて遊ぶ優しい姿が目に浮かぶ。良寛の書が素晴らしいのは、ゆっくりと丁寧に、流れるように書かれた細線が、格調高く、おおらかな雰囲気を醸し出すからだとか。「天上大風」、秋の雲が流れている。

破船なほ深きに沈み雁渡る　石井喜恵

海の難所、遭難した船が海底深く横たわっている。あれから何年経っただろうか、痛んだ船体には牡蠣殻が張り付き、ユラユラ揺れる海藻があたり一面を覆っている。暗い海の底から見上げると、空は太陽に照らされ、キラキラ光り輝いている。その大空を雁の編隊が棹形になり、また鍵形となって渡って来る。生涯を終えて海底深く沈んだ船と、生きるため過酷な空の旅を続ける雁、その対比が哀しい。

ゴン狐かも大粒の栗裏口に　十倉和子

夜来の雨と風が治まった朝のこと、家の裏口には大粒の栗がいくつも転がっていた。ふっくらとして艶の良い栗の実は、お店で売られている栗のように美味しそうだ。あまりに立派なので、風で落ちたというより、誰かがプレゼントにと、こっそり置いて行ったように思える。そう、小さかったころ、教科書で読んだ新美南吉の童話のゴン狐が置いて行ったのかもしれないなあ。

初時雨ポストに深く入る手首　鳥羽和風

初時雨が降った。寒くて、手がかじかんでくるようだ。そんな雨の中を、傘を差して手紙を出しに家を出た。気のせい

か、いつものポストまでの道が長く感じられる。万年筆で宛名書きしたので、濡れるとインキが滲むといけないからと、ポストの奥まで手首を突っ込むようにして、丁寧に投函した。ふと足元を見ると、アスファルトの道に雨粒がしきりに跳ね返っていた。

水揚げのこぼれ待つ猫鰯雲　　川崎道子

秋の空はどこまでも青く、お日様はポカポカと暖かい。港には大漁旗をなびかせた漁船が次々と帰ってくる。真っ黒に日焼けした漁師たちの顔は上機嫌そのもの。そこへ三匹、四匹とやって来たのは近所の猫たち。こちらも何かウキウキした様子だ。たくさん獲れた魚のおこぼれを待って、よだれを垂らさんばかり。誰もがみんな幸せ。空にはお馴染みの鰯雲が大漁を祝っている。

ちつちやな壺で戻る愛犬鰯雲　　西浦千枝子

子供のように可愛がっていた愛犬が亡くなり、小さな骨壺に入れられて帰って来た。他人事とは思えない句である。我が家のトイプードル君はもうすぐ満十八歳になる高齢犬。お散歩が大好きだが、遅かれ早かれ、この句にあるような日が来るのは避けられないので、涙なしでは読めない。写真を見るだけで涙、思い出すだけでも涙…。その日が来るのが恐ろしい。ちっちゃな骨壺を抱いて見上げる秋の空には、美しい鰯雲が浮かんでいたことであった。

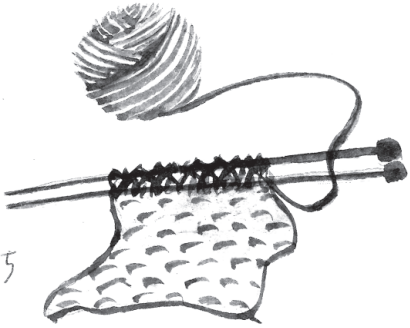
長き夜や寝返りを打つ妻の足　　日高道を

秋分を過ぎて、夜が長くなったなあと思う。ただ、秋とは言うものの、なんだか寝苦しく感じる夜があるもの。隣で寝ている妻もそうらしく、暗闇の中で時々寝返りを打っているのが、気怠そうな足の動きからも分かる。それにしても、こんな句を詠んで、奥様に「あら、いやだわ」と文句を言われないかなあ。ちょっとばかり心配でしたが、あえて紹介させていただきました。

十字路を巧みに曲がり秋の蝶　　石川理恵

二、三カ月前まではよく見かけた蝶々だが、最近はめったに見かけなくなってしまった。それが、久しぶりに街中を飛んで行くのを見た。真夏の頃に比べると、だいぶ小ぶりにはなっているが、あちこちと元気に飛び回っている。しばらく目で追っていたら、繁華街の十字路を慣れた様子で、器用に曲がって行く。まるで、この街にずっと住んでいるように。それが何とも言えず愉快だ。

季音雪



生きて　吉住光弥

生きて世の修羅に躓き冬木立
空中に葉影斬り合ふ冬木立
寄り添ひて裸夕焼冬木立
語らひて満天の星霜柱
坪公園寂しき人に冬ざくら

芙蓉枯る　網野月を

雨を吸ふ鉢の玉土枯芙蓉
その絮を両の手に取り枯芙蓉
蒲団の中で首裏どつちの手で掻くか
日溜をナビする猫や冬ざるる
冬麗や朝の挨拶のやうなもの

編　席

石井喜恵

編席につまづく齢花八ツ手
迷ひ込む花見小路や酉の市
笑はせて口説き上手や熊手売り
石磴百段研ぎゆく風や除夜詣
街冴ゆる終夜を灯すコンビニ店

冬うららら

石山かつ子

紐育まで地球儀廻し冬うららら
打首のやうに白菜抱へ来る
縁側に干す白菜を四ッ割りに
山際を行つたり来たり狩の犬
息揃へ大縄跳びの輪の中へ

渡海船

大橋廸代

目を凝らす鷹や補陀落渡海船
水仙の白より白し石灯台
大滝の裳裾匂へり冬の虹
合図待つ鯨は鼻を突きあげて
小鯨のおねだり鳴きの響く湾

紅裏

大村節代

冬木立何処ともなくオラトリオ
死語となりし教育勅語白鳥来
棟梁は眼鏡外して根深汁
紅裏（もみうら）は母の形見よちやんちやんこ
数へ日や続き気になるミステリー

一本気　小倉倭子

冬の星会ふ日の為のハートブローチ
言の葉を反芻しつつ冬の月
寒星や独り男の怒り肩
折れ易きこの一本気や枯芙蓉
瀬戸際の和解成立返り花

宇宙駅　栢尾さく子

荒星が未生の吾を指差せり
冬北斗無音に昏し宇宙駅
胸中を埋むる箴言六連星
年動く双眼鏡に冬昴
ぱたぱたと昔呼び込む古着市

十二月　菊池ひろこ

ポケットの裏地の赤も十二月
眠りより覚めよ日向の枯芙蓉
手をかざす一期一会の楷明かり
鋤焼の香の迂回する裏階段
星々の小さき町の羽子板市

悲風　五明昇

散り急ぐなかれ知覧の帰り花
冬帽を胸にをろがむ特攻像
枯菊焚く身ぬちに騒ぐ燠一つ
風冴ゆる波間遥けき沖ノ島
母と子の長き夜話玉子酒

庭の筒井　境　延昭

河豚食うて尽くることなき女帝論
蓋をせし庭の筒井や霜柱
顔見世や舞台装置の大仕掛け
山眠る地底にマグマ滾らせて
数へ日の委細明かせぬ交際費

冬紅葉　椎野　美代子

冬紅葉魚拓の口は叫ぶかに
店先に蛇・蝮壜冬紅葉
冬紅葉奥の奥なる病理室
冬紅葉旺ん襟足つかまるる
冬紅葉先生探す旅未だ

年の瀬　島津初花

綿虫の行方を追へば茜空
呼び鈴を重ねて圧しぬ十二月
白菜の舟に馴染ます赤穂塩
行く年の声に張りある朝市女
忘年のしもふり肉は華となる

師走富士　鈴木康世

長堤を風の小走る師走かな
一片の雲を阿弥陀に師走富士
煤掃の千の螺髪に千の塵
居酒屋の切り貼り多き古暦
壁画の如く壁に馴染みし古暦

時雨　田寺玲子

木枯や誓子旧居に海望む
凩や襟立て登る北野坂
書写山の光る食堂(じきどう)初時雨
舟で着く洛西の宿時雨寒
行く年や車灯つらなる大架橋

古文書　十倉和子

山茶花のお屋敷買手つかぬまま
古文書の解読遅々と白障子
紙鍋の豆腐ふつふつ雪催
吊干しの鱶鰭をどる冬日和
凩小僧夜つぴて星をかき鳴らす

冬銀河　永野史代

石畳冴ゆ教会を出でしより
枯菊焚く過去一つづつ消してゆく
枇杷の花かたまつて咲くさびしさよ
あの人もこの人もなし冬銀河
胸底に棲む人多し冬銀河

待春　西山貴美子

勝ち馬の尾が払ひゆく枯芒
遠来の客の如くに冬の蝶
春待つや眠りのなかに渦の増ゆ
弥(いや)増せる雨を両手(もろて)に年用意
年の瀬や地団駄踏んで人を待つ

冬の蝶　波多野寿子

庭石に夢か現か冬の蝶
さびしさに琴かき鳴らす北吹く日
虎落笛昔はありし人さらひ
せせらぎの音を楽しむ冬すみれ
在りし日の父の讃美歌冬銀河

仮病　星野和葉

目覚めに仮病考へたるや煤日和
先づ一杯のコーヒー決めて煤払
ジャズ流し手際よろしき煤払
煤払隠し戸棚をさらしけり
煤逃や映画のパンフぞろぞろと

立体カメラ　茂木和子

大いなる夕日に抱かれ山眠る
変異株「存じませぬ」と眠る山
木菟や夜通し廻る立体カメラ
外灯のちまちま灯る木菟啼く夜
数へ日や午後の陽ざしの喫茶店

冬の暮　矢作水尾

大根抜く手にずつしりと地の力
言問や澪（みを）に浮寝の都鳥
神木の走り根太し枯葉舞ふ
お悔みの文うす墨に冬の暮
冬の暮旅の終りの滑走路

冬の星　山中みどり

シリウスやむかし別れし男の眼
天狼や拱いて居る悪企み
寒昴うしろに誰かゐるやうな
冬銀河人妻となる孫娘
凍星や海老葛あんの茶碗蒸し

小面　柚木治子

実千両張子の虎を置く書院
小面の口して葛湯吹き冷ます
悲しげに首を埋むるスワンかな
雪女郎よはひを見せぬ後ろ影
参道の雑多な匂ひ年の市

年の瀬　由良ゆら女

白波のごとくマスクや人の波
年の瀬や窓拭く人の命綱
あつあつのピザを十字にクリスマス
暖炉燃ゆ過ぎしロマンを焚き代に
河豚雑炊終り良ければすべて良し

☆

☆

季音月

古暦　大場順子

「序の舞」の気品の褪せず古暦
碧水を引いて飛び立つ大白鳥
葛湯とく太初の闇を照らす如
踏むたびに子供に返る霜柱
父かとも思ふ冬木に凭れゐる

めでたさや　鳥羽和風

一掛ける一は一なりお元日
めでたさや屠蘇に浮き出る金の松
放水や出初に架かる祝ひ虹
道場に寝技宜しき鏡餅
闘志まだ少し残りて初句会

数へ日　松井由紀子

年頭からと推されて柚子の風呂
残生の明るき午後を冬至風呂
数へ日や白足袋買ひに日本橋
ギャラリーに富岳懸かりて年暮るる
煌めきの街を離るる年の果

年の暮　井上燈女

白菜積む轍の深き畑の中
冬支度仕分け幾度繰り返す
梵鐘の余韻の中に末枯れて
何よりも平凡がよし年の暮
風邪の児に巻き戻し置くオルゴール

緋の袴　丸山マスミ

釣人と水面住み分け浮寝鳥
枯蔓の一縷の先に朱きもの
咲き切つて身は風まかせ枯芙蓉
霜柱神の庭掃く緋の袴
酒蔵に息づく酵母星冴ゆる

冬の暮　梅澤佐江

琴線に触るる音して月冴ゆる
夕暮の静謐纏ふ枯芙蓉
括られて兵馬俑めく白菜畑
束の間の逢瀬のやうな冬夕焼
幻日を消し薄墨色の冬の暮

都鳥　森川義子

大川の水脈を引き寄せ都鳥
冬満月溜池はいま鏡凪
歳晩の街に出逢ひしちんどん屋
峠道里を眼下に寒暮の灯
火事近く我が不意打ちの不整脈

札の辻　宇田白鷺

故郷に生くる幸せ雪催
寒鯉やふつと動きて水にごす
冬の陽のまぶしき道や札の辻
木の本や晴れし冬日の鮒釣り
行く年や祓ふ榊の音すがし

大白鳥　高島寛治

胸反らす大白鳥にある威厳
身も火照る母の匂ひの葛湯かな
大白鳥群れて湖面の傾ぎけり
神木に宿りし声か虎落笛
朝市の紅一点が売る白蕪

火事　山田美佐尾

卒寿迎へ昭和懐し鮟鱇鍋
船上ワイン紳士淑女のクリスマス
砂浜に懸大根の影ぞ濃し
恐いもの見たさに走る火事現場
火事遠く影絵のやうな美しさ

金盃　町野広子

終の地は海のない町枇杷の花
箱のまま片す金盃菊枯るる
括られてなほ奔放に枯るる菊
早早と下ろす鎧戸風冴ゆる
冴ゆる夜の足音二つ過ぎゆけり

鎌倉小春　森本早苗

冬晴れの富士置き去りにひかり号
鎌倉小春観音様と鳩サブレ
小春日のお御足参りてふ御縁
小春日の波縫ふサーファー片瀬浜
「えのすい」の海月百態冬うらら

雪催　松宮保人

永源寺の赤きポストや冬紅葉
ねんねこを覗けば丸き眼の男の子
日参りの明かり灯せば雪催ひ
餅搗や手返し女の手際よし
年歩む歳重ねたる極みかな

初御空　池田雅夫

坦坦と浮き彫りの町大旦
県境の白き山脈初御空
御降の光団団梢かな
年酒酌む晴れて大人の仲間入り
「宝」てふ七福神の船標

冬紅葉　西浦千枝子

陽に映ゆる山の起伏の冬紅葉
散り残る雑木紅葉や山飾る
野辺で摘む甘さとぼしき冬苺
冬陽さす山懐の一軒家
園児に歳を訊かれ戸惑ふ木の葉髪

白内障手術　野口和子

被り癖そのまま亡母の冬帽子
目薬を鼻に落として十二月
冬の夜や入浴剤は登別
水晶体は人工レンズ冬の虹
借景は秩父連山吊し柿

赤マフラー　荒井倶子

茶の花やほんのり白き昼の月
茶の花や「ゆき」と呼ばるるペルシャ猫
蔵町の鐘の音よどむ初時雨
名刹は訪はずじまひや夕時雨
美少女と紛ふ少年赤マフラー

日向ぼこ　藤澤喜久

凍星の零れむばかり城ヶ島
星冴ゆる西吾妻山硫黄泉
補聴器外し生身に浴ぶる日向ぼこ
生も死も背中合せや日中ぼこ
雪ほたる「まくら」の小三治もう見えぬ

時雨るる　井口俊晴

時雨きて相合傘の至福かな
高速の闇へ飛び去る時雨かな
風雪を刻む顔枯芙蓉
人と同じく犬にくるくる襟巻を
遠き日や山幸彦の山眠る

聖夜　渡辺舎人

全能の姿は見せず聖夜劇
山越えの「キリストキント」クリスマス
しんしんとニッポンの雨聖夜ミサ
漱石忌隣りの猫が偉さうに
ポインセチア控へ赤心を競ひ合ふ

胃袋　霜中冬至

沢庵大根太からず長からず
朝食に昼食兼ねれば雪近し
味噌蔵の匂もよろし時雨月
胃袋の一寸斜めや小夜時雨
道よぎる毛虫のスピードいとほしむ

凩　井関礼子

凩や峡に半生住み古るも
凩やときに花鉢揺すりもし
永らへて年末機嫌伺ひも
ほつこりと鍋囲ひしも老二人
マスクして目は口ほどに物を言ひ

古暦　岡野順子

余白多き古日記とはならず済む
古暦日頃雑事に追はれきし
古日記暦の頁に悔いもなし
古暦雑記帳にまぎれけり
古暦母の手紙も混じるかな

数へ日　内田恵子

ふるさとの山を恋ふ母石蕗の花
欠伸するやう煙を吐きて眠る山
軽石を吐く海底火山冬漁港
背広姿の父神棚の煤払ひ
数へ日や明るい色のルージュ買ふ

冬至酒　上戸千津子

湯上りに至福の時ぞ冬至酒
数へ日の路地に急き立つ灯油売り
屏風絵に吸ひ込まれゆく古刹かな
点在の灯りにほつと冬野道
歳暮着き故郷の海の煙上ぐ

冬灯　松山清子

冬の日や面和み居る鬼瓦
托鉢の僧の連なる冬木立
枯木立沈む夕陽に背を押され
仏彫る匠の所作や冬灯
木立抜け厳然として冬の滝

測量士　川崎道子

冬紅葉嬰の手形の葉書くる
手袋をぬぎて指切り針千本
着ぶくれて車のノブの静電気
柚子風呂の子等に声かけ薪足す
北風や浮き足立ちし測量士

季音（雪・月・花）の投句について

季音の投句用紙を一月号から巻末につけました。この投句用紙を用いて投句をして下さい。

※雪・月・花欄のご自分の該当欄を赤ペンで囲む事
※楷書で書く事
※万年筆またはボールペンで書く事
（鉛筆は不可）

季音花

俳聖　近藤徹平

俳聖の俳句反芻枯野原
文化の日平積みゴルゴサーティーン
最寄り駅へ突つ切る畑霜柱
白菜や畑に座禅の達磨めく
流れ寄る椰子に軽石冬の海

尼僧院　正木萬蝶

結界の山茶花は濃し烏が騒ぐ
中庭に香る花枇杷尼僧院
往年の艶を残して日向ぼこ
古暦余す句会のあと一つ
同胞の慶事で仕舞ふ古暦

木の葉雨　大塚茂子

母となる日を待つ娘毛糸編む
娘はすでに母の目差し毛糸編む
木の葉雨鐘の余韻のうらおもて
「あ」と口を開け新巻の吊られけり
息白し人馬一体走り抜け

すすき　中野彊

十二月美男富士ある湖畔かな
はてしなきすすき野の先湖光る
すすきゆれ集まり島を作りけり
菊懸崖その傾きに語りかけ
植木師の枯葉飛ばして威勢よし

霜の夜　宮崎紫水

女教師の背筋ぴりりと冬の朝
女生徒のお喋り尽きぬ冬日向
短日や影なき下校の声響く
洋館の灯に和色あり冬の暮
霜の夜秩父訛りに戻りけり

冬麗ら　井上玲子

赤と黄に綾なす紅葉平林寺
しみじみと並ぶ卵塔冬日差
冬麗ら放生池に緋鯉群れ
風冴えて歩む禅林暮れ早し
茅葺きの山門ゆかし冬暮光

街の灯　河野はるみ

街の灯の連鎖で点る冬の暮
通りまで店の灯照らす冬の暮
月光に瘤曝け出し冬木立
夜の柝（き）の音聴きつつ手酌酒
鈴生りの朱き千両吉右衛門

白鳥　佐々木典子

群青を抜け白鳥の白光る
白鳥の眠ればまりのごときかな
何気なき日日ありがたく葛湯呑む
冬至の日すとんと落ちて無傷なり
夕闇に少し開きし寒椿

ディナーショー　熊倉千重子

鋤焼を食うて破顔の反抗期
冬の星湖かこむホテルの灯
ポインセチア真つ赤に燃えてディナーショー
雪女夜更けの里の窓叩く
褪せし法被の高き売り声年の市

帰郷　日高道を

没落の過去は語らず大冬木
衝立の旧家の威厳残しをり
冬の星旧街道の闇の上
虎落笛一人寝の夜の胸の内
蕎麦を打つやもめ男や年の暮

日記買ふ　青木鶴城

別れ日や天狼光失はず
都鳥人ごみに聞く国訛
松島や旅路の締めの小粒牡蠣
インク文字滲む手記群開戦日
十年を如何に遺さむ日記買ふ

枯木星　野田静香

出来不出来のけしゴム判子暮早し
寄鍋や自慢話を聞き流す
空つ風宇宙中継観てをりぬ
手を振ればビルの谷間の枯木星
来ぬ人の足音を待つ一冬木

若狭箸　福田千春

室咲きや介護施設のアクリル板
芯起きあがる白菜の生気かな
風呂吹きや喜寿の祝の若狭箸
枯芙蓉ここに財閥保養所が
鬼平の寂声恋し枯芙蓉

波紋　石川理恵

陽の差して水鳥の朝始まりぬ
波紋とは水鳥たちの作るもの
子守して親の守りして日向ぼこ
花ひひらぎ零して風の知らんぷり
数へ日の喪服確認してをりぬ

さようなら　石田慶子

枯芙蓉無声映画のかかる小屋
芙蓉枯れ「サヨナラ」と書くハイボール
長老の俺は会つたぞ雪女郎
裸木のあと一枚の完成形
ちくわぶの無きおでんとは夫を待つ

畳替へ　田中章嘉

木の葉散る道に張り付く水溜り
珍しや農家の庭で畳替へ
白き息吹きつつ磨く窓ガラス
思ふほどポインセチアの赤不足
節料理中に慈姑の頭数

冬紅葉　下川光子

裏おもて風と戯る冬紅葉
境内の夕映え惜しむ冬紅葉
冬紅葉くぐり色無き藩主廟
ユーターンしての十年大根干す
灯ともせば賑やかなりし年の市

行く年　野平美紗子

兄逝きし悲しみ抱へ年は行く
雪帽子余り毛糸を利用して
枯野の果て青くくつきり武甲山
鳰見事な逆立ち向う岸
大皿に大き目玉や金目鯛

日向ぼこ　瀬戸雄二郎

日向ぼこ野良猫一段高い所
客の来ぬ研屋終日日向ぼこ
柊咲く香りと棘を武器にして
引き抜きし大根何と無防備な
葱抜いて荒野となりし畑かな

浮寝鳥　後藤綾子

浮寝鳥綴れ織りなす波頭
図書館の暖房優し夢育つ
冬日燦号外に湧く浦和駅
就活の背広が並ぶ日向ぼこ
家普請足場下り来る大嘘

十二月　葛城千世子

制服のままスマホゲームや冬座敷
朝散歩枯木を避けてまはり道
オンラインの受講報告十二月
水面の輪に身を寄せ合ふ冬の鴨
大マスク人の見極めむつかしく

実万両　宮﨑チアキ

築五十年変はらぬ松に実万両
庖丁を磨ぐ砥石に水や年用意
仏前に先づは一献桜鍋
張る枝の鋼の如き冬木立
隠水（こもりづ）のささらぐ里や冬茜

冬日　飛永鼓

軒先のをんなの居場所小六月
小春日や衝動買ひの赤い服
小春日や一段高く子等の声
囲ふもの皆囲ひたし雪催
足音の聞ゆるばかり雪催

冬陽の部屋　川島典虎

人と鳥は好みが違ひ実千両

冬日射し餌気に入らずはじき出す

片目つむる座敷に冬日余りたり

植木鉢いくつ到した猫の恋

子供等がくすぐりつこしてゐる猫じやらし

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰　山本鬼之介

【指導者】網野月を

【作　品】5句　【受講料】1、000円

【方　法】①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付

【送付先】網野月を　電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

圧倒的な季語数・例句数を誇る
俳句歳時記の最高峰、15年ぶりの大改訂!!

新版
角川俳句大歳時記
春・夏・秋・冬・新年

角川書店 編
【編集委員】
茨木和生
宇多喜代子
片山由美子
高野ムツオ
長谷川櫂
堀切実

本書の特色
見出し・傍題合わせて1万8000季語以上を収録
旧版より110%以上増ページで、より充実した内容に
現俳壇を代表する俳人・研究者による監修・執筆
例句数5万句超。近年の秀句もふまえ
旧版から大幅に刷新

2022年2月
『春』より
順次刊行

特設サイト OPEN!

A5判／上製／函入
約700～800頁(予定)
各巻定価 5,995円
【刊行予定】『春』2022年2月28日／『夏』2022年5月／『秋』2022年8月／『冬』2022年11月／『新年』2022年12月

KADOKAWA　KADOKAWA公式サイト https://www.kadokawa.co.jp/
発行　株式会社KADOKAWA　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

『水明誌』を繙く（水明十二月号）

竹内宗一郎（天為同人・街同人　編集長）

はめごろしの三角出窓蔦迫る

椎野美代子

「蔦迫る」の措辞が出色。蔦がぐんぐん蔓を伸ばして壁をつたい、青々とした葉を茂らせている様子、蔦の勢いのあるさま、そんな景が頭の中に浮かんでくる。植物の生命力が臨場感を持って伝わってくるのだ。

「三角出窓」は、外に突き出ている部分が三角形に張り出した出窓のことだろう。これまたリアル、景が構造的、立体的で印象鮮明。

さらに、この句を引き立たせているのが上五の「はめごろし」という言葉。はめごろしは、障子やガラス窓などが固定されていて、開閉できないようになっているもの。風を通す必要のない窓などに採用される。もとは建築用語だが、今では、一般に広く使われている用語である。これを漢字で書くと「嵌め殺し」となる。何と物騒な言葉なのだろうと思う。嵌めて、動かなくすることを「殺す」と表現したらしい。普通に使ってはいても漢字で書くとやはりきつい言葉である。掲句ではそこがひらがなになっていることも句の出だしをしなやかにしていて殊更巧みであると感じた。

親のやうな女将相手に温め酒

井口俊晴

「温め酒」は「あたためざけ」と読み、もともとは重陽の日の行事の一つで、陰暦の九月九日に酒を温めて飲むと病気にかからないとされたところからきた季題だそうである。だから、夏の冷し酒、冬の熱燗、に対する秋の温め酒と捉えたら間違いである、などと書かれている歳時記は多い。が、しかし、個人の嗜好から言っても、気温が下がってきてお酒を温めて飲む、そこに充分日常的な季節感があると思うのですが、如何でしょう。

この句は一人称、親のような女将を相手に温め酒を酌んでいるのは作者と見るのが自然。なんとも幸せなひと時が見えてくる句である。

掲句からは、決して広くはないカウンターだけのお店が想像される。しかもこの日は、客も少ない。作者は、おそらく常連なのだろう、女将と差し向いで話をしながら料理をつまみ、温め酒をちびちびやっている。そんな雰囲気が伝わってくる。他愛もない話が続くのもまた幸せなもの。親のような女将に何かちょっとした相談事などしているのかもしれない。

現代俳句鑑賞

網野月を

深海を泳いでいたり鱧の骨　久保純夫

（『俳句四季』12月号・巻頭句より）

座五の季語「鱧の骨」が主語となっていて、中七の「…泳いでいたり」が述語として解釈するのが順当であろう。加えて「…たり」は完了の意であろうと筆者は考えるのだが、概括的意味合いも大いに含まれているであろう。つまり、目の前の鱧を作者は骨として把握しながら、かつてその身は深海にあったと言っているのである。そして多くの深海に生きている鱧へ思いを馳せているのである。「鱧」は夏の季語であり、一寸二十六筋に切られているのが「鱧の骨」のイメージなのであるが、細断されていない一本の背骨を思い浮かべてしまった。他に「優柔不断とは大根の愛し方」がある。

目の前を恥づかしさうに秋の蝶　森さかえ

（『俳句四季』12月号・空き地でいっぱいより）

普通ならば座五の季語「秋の蝶」が主語で「恥づかしさうに」飛んでいるのが述語で、その述語（動詞）が省略されているように読める。一方で中七と座五が切れているとすると作者自身が「秋の蝶」の目の前を「恥づかしさうに」通り過ぎたということになるのだが、こちらの読みの可能性は低いであろうか。「目の前」というのだから後者の解釈の場合は、座五の季語「秋の蝶」は誰かの面影を投影している様でもあるのだが。

雪折れの木に夜が来る雪が降る　原雅子

（『俳句界』12月号・新作巻頭3句より）

句中に主語と述語が揃うと物語性の強い句が出来上がることがあるのだが、将にその典型的な構成を持つ句である。上五の「雪折れの木」も動詞に依って修飾をされているが、「夜が来る」「雪が降る」と立て続けに主語と述語（動詞）が繰り返される。この畳みかけが句景を活写することに繋がっているようである。よい意味で、創作するということの冒険的な作為を感じる。

寒の入り阿吽の門が雲を吐く　満田三椒

（『俳句界』12月号・吊し柿より）

「阿吽の門」というと寺社の山門の仁王像や狛犬などの形相を想起する。例えば仁王像の安置されている金剛峯寺の大

門などは見上げるばかりの門であり、庇越しに雲が屋根の影から出現したように見えた、と解釈した。

中退と記す履歴書枇杷の花　橋本榮治

（『俳壇』12月号・冬日差より）

座五の「枇杷の花」の斡旋が秀逸なのである。自分の人生を振り返る行為は、何となく忸怩たる思いのするものである。履歴書に記す一言一言に矜持とそして後悔が在るのである。十一月に咲く「枇杷の花」は目立つことなく静かに咲いている。作者の心境に沿っているようだ。ただ香りはしっかりと放っているのだが。

人の息ほどの風吹き女郎花　依田善朗

（『俳壇』12月号・稲架の棒より）

上五の「人の息ほど」のいわば直喩表現が、読者にどう解釈されるかで、「女郎花」の風に揺れる姿が決定するようである。筆者はごくわずかな風の強さを思いやったが、「人の息ほど」の表現は、風量だけを意味していない。風の暖かも意味していると考えられるし、風の「女郎花」への思いやりのようなものまで読み取れるのだ。一つの属性だけを表現するのではなく、いくつもの属性を編み込みながら表現するという術法の一方途を探っている句ではないだろうか。

初時雨豚の角煮が食べたいよ　坪内稔典

（『俳句』12月号・豚の角煮へより）

自由奔放というか、融通無碍というか。有季も無季も自由自在である。俳句の世界の幅の広さを保障してくださっている俳人の一人である。他に「長崎の豚の角煮へ行こう明日」がある。

晴れた日は戦が見える麦の秋　伊藤政美

（句集『雪の花束』より）

真面目に俳句に取り組んでいるとこういう句が出来る。「遊牧」主宰塩野谷仁氏の言である。人間同士が行う戦争という行為は、俳句にとって永遠のテーマの一つであろう。作者は麦秋の「晴れた日」に時空間を設定している。他に「蝸牛吟遊詩人ともなれず」がある。

娘のために使ふ一日花八ツ手　林桂

（句集『百花控帖』より）

句集『百花控帖』は句誌「鬣TATEGAMI」に連載したものに書き下ろしの句を加えて編まれたもので、文字通り百句からなり、質感の横溢した句集となっている。「あとがき」にある花の本質についての一見フロイト的考察は、筆者にとって目から鱗であった。座五の季語「花八ツ手」はめずらしく晩秋・初冬に咲く花である。物陰にひそと咲く花だが、それだけにこの句意と配合するとより奥行きのある句境へ誘っているようだ。筆者の最も信頼している花である。

俳誌望見

梅澤佐江

『卻』　令和三年一一月号　通巻三四三号
主宰　山本一歩　発行所　東京都町田市

平成五年五月、横浜にて創刊。師系小林康治。「自然との係わりを、切れと調べを重視して詠う」を理念とする。（月刊）

主宰詠「落葉」　一〇句より

転がつて痩せてゆきたる毛糸玉

毛糸玉に焦点を当てたお句。毛糸を辿ると、愛する人の為に編物に精を出す奥様の指と編棒が。「痩せてゆきたる」に穏やかな時間の流れと温かな眼差しを送る作者の姿が見える。

干布団素直に畳まれてはくれぬ

干されて湿気も蒸発し、ふかふかになった布団に残る日の匂いは何とも気持の良いものである。「素直に畳まれてはくれぬ」の的確な表現に写生の目と手触り感、諧謔を見る。

つまらなし落葉の掃かれたる道は

落葉のふわりと積もった道を歩くと、何故かわくわくして踏む度に落葉の声を聴くようで愉しい。しかし、道路沿いの店舗や住宅は風情に浸っている訳にも行かず、大きな塵袋を何袋にも掃き纏めている。社会生活の秩序、調和と言うものであろうか、何とも痛し痒しである。「つまらなし」に余情を残す。

芒原あたたかさうに枯れてをり

飛ぶばかりに綿毛になった芒原は羽根布団の羽のようにふわふわとして、陽を浴びて金色に輝くさまは思わず包まれて見たくなる。「あたたかさうに」の措辞が、芒原の大景を醸し出し映像迄見えて来る。つくづく眼の中に閉じ込める写生の大切さを知る。

枯蓮や水は鋼の色をなし

刀折れ矢尽きるの故事のように、枯れて水中に没したり泥中に折れ曲がったりした枯蓮は哀れな姿となり、澱んだ水は正に刀の鋼色、見渡す限り修羅の体である。しかし、蓮根を育て終え力一杯戦い抜いた後の姿に感じられ、物事を続ける為の手段が有る間は懸命に生きよと教えられた気がする。

全句を通じ、平明で写生に基づく確かさを大切に、昇華された深い味わいと穏やかな作風に共感を覚えた。

「秋の声」　有馬五浪

半袖の肘より秋に入りにけり　有馬五浪

秀嶺集　六名　各七句より

ロッキングチェアーに揺るる夜長かな　大関　洋

いなびかり田伏の中を照らしけり　高尾峯人

山巓集　四名　各七句より

敵味方作らず生きて穴まどひ　小林比奈子

山門のはだか電球そぞろ寒　榊原　素女

山間集　主宰選　一七名　各七句より

温もりの残る案山子を抜きにけり　大関　司

躓きて無事なる二百十日かな　表　成枝

山本一歩主宰の、やまびこ雑記『過去を「今」に』を、身に沁みて学ばせて頂きました。

令和３年

年間作品回顧

期間

令和３年１月号
～令和３年12月号

華の刻

石井喜恵

西山貴美子

春の闇ドア・チェーンが揺れてをり
春落葉乳母日傘のまま老いぬ
存問の筆やはらかく梅雨に入る

ドア・チェーンを外し迎え入れた人は誰なのでしょう。春の闇ともなると殊の外ミステリアスである。乳母日傘とは何と羨ましい。優しいお人柄の由縁だったのですね。お見舞の書状を頂いたのでしょうか。やわらかな文字に心が籠っている。

梅雨の蝶即かず離れず去りゆけり
筆塚の一文字太く昼の虫

夏蝶の中でも梅雨の晴れ間を飛ぶ蝶には、独特の情趣がある。足元に纏わりついていたのが、何時の間にか去って行った。その儚さに心を止めた作者。筆供養の為に古い筆を埋めて築かれた塚、碑の一文字は如何なる字であろうか。

菊池ひろこ

赤が好き縞模様編む十二月
春愁や見慣れぬ小筥みな赤し

背が高く銀髪の美しい作者には赤い色が似合いそう。縞模様に彩られた鮮やかな赤い色が、眼前に浮かびます。見慣れぬ小筥も赤い色。春愁を誘う中味は何か気に掛ります。

風薫る大抽出を抜く作業
羅や薄暮の野外映画会
仕組まれし二度目の出逢ひ菊の宴

実は筆者の家にもどうしても開かない抽出がある。作者は根気良く抽出しを抜く作業を完了、風薫るとは羨ましい。野外映画会、蚊に刺されながら大スクリーンに見入った頃を思い出した。さて三句目、出逢いの首尾は如何でしたか。

由良ゆら女

寒紅の口一勢にオラトリオ
花の雨悪夢のままに朝が来て
茄子の紺めざめるばかり糠に釘

寒中の澄んだ空気の中、荘厳な聖譚曲が聞えてくる。寒紅で華やかさも伝わってくる。三句目、糠に釘とは手応えなく効き目のない譬えであるが、糠漬に入れる釘は茄子の紺を鮮やかに引き出してくれる。俳諧味のある一句。

金風や老いに一振り塩胡椒

敗荷や撥音はげし壇の浦

水明大阪の重鎮である作者、老いなどとは勿体ない。ますますお元気で辛口のご意見、ご指導をお願いします。二句目、平家琵琶の極め付き、壇の浦の真に迫る語りが胸を打つ。

鳥羽和風

禅僧の草鞋一列春の雪
生きてれば母は百歳蓬餅

早朝、修行僧が列をなして行くのに遭遇したことがある。春の雪道を素足で草鞋履きとはさぞ冷たいことであろう。二句目、亡き母を偲ぶ蓬餅をはじめ、桜餅、わらび餅、花見団子、葛饅頭の句が五句並ぶ。何とも美味しそう。

五月闇蠢くものは皆怪し
ターザンの声して山は深緑
初時雨ポストに深く入る手首

万物の活発な動きが始まる明るい五月。その暗闇にある物は何となく不気味である。二句目、一世を風靡したターザン映画。懐しいなあー。三句目、この手紙出そうか、出すまいか。逡巡している作者の様子が窺える。

石田慶子

浅草寺凶を五回の初みくじ
エコバックに押し込む上着春暑し

娘四人父の落胆桐の花

おみくじで凶を五回とは恐れ入る。反って俗を浄化して神聖な感じがする。二句目、今やエコバックは必需品。新しい語を取り入れて作句する作者に好感を持つ。

羅にリストカットの哀しさよ
九十の母の差配や菊の酒

まずリストカットの語意にハッとする。「羅」の季語で、危うい心の在り処が垣間見える魅力的な一句となった。二句目、九月九日の菊の節句を九十歳のお母様が取りさばく、九の字の重なりが心地良く、お元気な様子が伝わってきます。

染谷正信

寒星や秘湯の宿の俳談義
亀鳴くや意外と長き頭脳線
南指す海舟像を飛花落花

図書館通いが日課の作者、とにかく勉強家である。折角の旅先でも俳句談義に余念がない。頭脳線が長いのも頷ける。三句目、春の吟行会で、見事「三極、天」を射止めた一句。海舟像に散りゆく桜を格調高く詠んだ佳句です。

作戦は正面突破今年竹
御河童は口が達者よ鳳仙花

律儀な作者、事にあたっては姑息な策など弄さない。小気味良い一句。情報過多の現在の子供を活写、思わず苦笑い。

拈華微笑

大橋廸代

星野和葉

手帳二冊てんてこ舞ひの十二月
切り込みのある糸尻よ春深し
雨蛙鳴くや今宵は坊泊り
人は今旅を控へし鳥渡る

「手帳二冊」は多忙な日々を如実に現す。永年の敏腕に深謝。糸尻の切り込みとは萩焼の茶碗だろうか、お茶席での拝見か風情ある高台と春深しの季語がぴたり。高野山夏行の福智院の森青蛙を思い出す。暁闇の奥の院参拝の森厳さと句座の楽しさを。渡り鳥は太陽と星座で方向を、水系や山容で地形を覚える。オミクロン株におびえる今、旅する渡り鳥に願いをこめている作者の正直な吐露。

石山かつ子

夜は夜の風が軒打つ鮎の宿
獣の匂ひ風に乗り来る茸狩
新蕎麦や昼も燻して大藁屋
棒持てば吾は大将秋の山

鮎の背ごし、あぶり焼き、鮎飯と鮎三昧に舌鼓をうつ鮎の宿。朝露をふみしめいざ茸狩へ、上五中七に森の深さと薄気味悪さが読みとれ趣が増す。「昼も燻して大藁屋」でそばの美味がわかる。昔諏訪大社の下社前で食べた蕎麦がおいしくて追加注文したのを想起。落葉樹の葉が色づき次第に裾野に降りてくるやや低目の秋の山は、子供達の絶好の遊び場、手頃な棒一本で勇気りんりんの餓鬼大将の出来上り。

十倉和子

朱雀門見えゐて遠し青き踏む
橋上を灯を撤く列車葉月潮
風紋は神のたはむれ雁の列
ゴン狐かも大粒の栗裏口に

春になった喜びを足で踏む実感が伝わる。平城京の七十余年へ思いを馳せる。「灯を撤く列車」が鮮明で渡り過ぎた後の漆黒の闇と葉月潮が妖しく美しい。青空を背に、砂のさざ波の「風紋は神のたはむれ」とは言い得て妙である。雁が音に光源氏や芭蕉も詠草を残し、人生の来し方にものの哀れを

感じたようだ。大粒の栗からゴン狐を発想する頭の柔らかさに脱帽、新美南吉の心は後生へ伝えられる事間違い無し。

宇田白鷺

笑む人に勿忘草を飾りけり
沈丁花愛別離苦の染み渡る
若狭路の海見よ山を夏きざす
芋虫や朝の大気の透き通り

さりげなく詠んで深い哀惜の念が強く心に響く。門灯を消して闇に香る沈丁花と「愛別離苦」の悲痛なことばが呼応して今なお忘れられぬ悲しみが渦を巻く。大景をみごとに詠み若狭愛のあふれた気持の良い句。空気のおいしさまで伝わってくる。撒きちらす糞が日増しに大きくなり芋虫の存在を知る。透き通る大気の育てる葉っぱのおかげだ。わが家の芋虫も10センチを超える肥満児で、或る日突然消えた。

大塚茂子

青鷺やまた田を棄つる老農夫
鳥よりも早起きの夫草をとる
炎天や読書と決めし日の奢り
畦を行く飛ぶ翔ぶ蝗捕る老女

後継者のいない上に高齢化で棄てざるをえない現実。ソーラーパネルに席巻されてゆく田舎の田畑を見ると胸が痛む。爺さまが耕すあとを鳥達が従い啄む光景も消えると思うとやるせない。働き者の御主人はいずこも早起きだ。お手柄の「日の奢り」の措辞に一本芯の通ったお人柄と感動。もしや炒ってつけ焼きや、佃煮にするのかと思わせる老女が滑稽。ぶつかってくる蝗の羽音が聞こえる臨場感横溢。

日髙道を

黒南風や舞台稽古の柝の湿り
ナンプレに嵌るをんなや油照
村の子のでんぐり返し大夏野
三日月の舟の細さよ母百寿

長雨の降りつづく梅雨、じっとりと汗ばむ季節感を捉え、舞台稽古の「柝の湿り」に感性の冴えをみる。ナンプレは大麻のように嵌ると止められない。家事を後まわしにし、時間の無駄使いは不快でやりきれない油照と同じだ。でんぐり返しの村の子の天真爛漫は、未来へ希望を託し懐の深い一句。戦中戦後のきびしい時代を生き百寿とは御立派。夜空をひきしめる三日月のように凜とした母上を尊敬してやまぬ。

六　花

菊池ひろこ

大橋廸代

真白なる潮目一条小鳥来る
ゆさぶりて立夏の風を摑む真帆

海面にできる潮目の白さを目にとめ、色とりどりの小鳥が来る頃だととらえた、海辺ならではの季節感がすばらしい。追い風を全面に受けた真帆、「ゆさぶりて」は「帆自らを」と解釈した。「立夏の風を摑む」帆の擬人化に惹かれる。

一滴の水をはなさずひらく蓮
日永夫いどむ数独星五つ
花明りコロナ寠れの仁王かな

蓮の句。「擬人化」とは別の物を思わせる正調の詠み方を感じた。星五つの数独とは平面か?立体か?「日永夫」なる言葉が優しい。「花明り」が「仁王のコロナ寠れ」を社会性俳句とは異なるものに。

島津初花

八十八夜粟粒ほどの雨が降る
撮り鉄の足場の沈む稲穂中

大雨の日もある八十八夜。小さな雨粒の時の「粟粒」が効果的。一瞬を待つ撮り鉄。稲穂の中に沈む足場に目をとめた佳句。

岩走る水のかかりし蕗の薹
葱坊主曇る一日を立ち竦む
三姉妹育つ家系ぞ桐の花

写生句でありながら「岩走る」が枕詞のような効果を出している。曇天との取り合せから葱坊主の「立ち竦む」に至る点が魅力的である。姉妹を思わせる桐の花は、お嫁にゆく時の桐箪笥をも思わせる。

五明　昇

ポツダムの空の青さよ敗戦日
飛石は着物の歩幅初しぐれ

ベルリン郊外ポツダムの名を冠した降伏要求宣言を日本は受諾。玉音放送の日の空をポツダムの空の青さと言い切ってある。「着物の歩幅」なる表現の巧みさと思いやりを感じさせる。

木曽馬の高き嘶き山笑ふ
筍を土ごと包むローカル紙
流れ星落ちては増ゆる漁舟

木曽馬という固有名詞で、嘶きと山笑ふの取り合せが生きてくる。筍を掘りに行ったその地の「ローカル紙」に土の温

かさを感じる。流れ星と漁舟のように、数的に異なるものの因果関係が楽しい。

森本早苗

朱の鳥居鹿の日課の始まりぬ
日盛りをぶらり角打ち港町

何年か前に塗り直された春日大社の二之鳥居であろうか。今は日常的に見慣れた鳥居を、人間ならぬ鹿で表した手法が見事。角打ちの語源が転じて「店の一角を仕切り立ち飲みする」ことに。桝の縁に塩を置いて飲むこともあるが「港町」が潮の香を思わせる。

ひとときを水に流れて水馬
初紅葉御座船の窓閉ぢしまま
各各方密避けられよ蝌蚪の池

水馬が時に力を抜き水に流れていた。その瞬間をみごとに捉えてある。紅葉が始まる頃物語も始まる。情緒もあり、ユーモアも感じる。蝌蚪の池に託して、三密を軽く表現した点に共感する。

井上玲子

長き夜や鳥羽僧正と一つ灯に
秋めくや池塘に影を千切れ雲

僧正への畏敬の念が「ひとつ灯に」で読む人にも伝わってくる。尾瀬ヶ原などの池塘（池沼）。夏が去ったという思いが感じられる。

噴煙は太古の息吹冬晴るる
詩を追ひ逃水を追ひ八十路かな
胸中にひびく海鳴り冬銀河

太古の息吹と見た感覚がすばらしい。詩と逃げ水の取り合せで成功している句。冬銀河を水と見た句の中でも、「海鳴り」が圧巻。

青木鶴城

栗飯やとんがつていた日の弁当
真実は引出しの中さくら貝

とんがっていたのはご本人？　奥様？　栗飯が和らげてくれたであろうと想像できる。栗飯なる季語の斡旋が巧い。引出しの中にあったさくら貝、「綺麗だったから」は言い訳か。「真実」という硬い言葉が共感を生む。

貝のよに口をつぐんで潮干狩
ひとりゐや蚯蚓鳴く日の寝巻紐
蒼天に富士差し上ぐる出初かな

無口への「貝のように」の喩えが利いている。寝巻の紐と鳴く蚯蚓で日常的な侘しさを表した佳句。ポンと一つ手を打って両手を上げる梯子乗り。富士山を差し上げていると見た新年らしい句である。

山脈縦走

五明　昇

波多野寿子

まつすぐな吾娘が好きですシクラメン
早春や白磁の皿のカルパッチョ
あをぞらは夢の色かも蘇芳咲く

永遠に変わらぬ作者のみずみずしい感性に脱帽する。「まつすぐな」の句は爽やかな娘さんとシクラメンの取り合わせが絶妙。「早春や」の句は白磁の皿に盛られたカルパッチョに思わず食欲をそそられる。あくまで青い信州の空は明日へと繋がる夢の色かも知れませんね。

亡き友の好きな信濃路花わさび
夫想ふ此の姿よき瓜の馬

歳を重ねるとともにかけがえの無い人たちがこの世を去り、身ほとりが淋しくなるのは人間の宿命。残された者はいつまでもその人たちの事を忘れずに思い続ける他ない。

永野史代

銃口の気配背に置く霜の夜
わたくしの真うしろにゐる雪女郎
菅公の無念の声ぞ荒東風す

作者が時として詠む臨場感たっぷりの句は、まさに「サスペンス俳句」とでも呼べようか。しんしんと冷え込む霜の夜は、確かに誰かに狙われているような気がする。雪女郎は私の負う背負籠の中に……。今でも京都では菅公の怨念を恐れ、「早うお帰り」が出掛けの挨拶になっている。

春の虹逢ひたき人はなほ遠く
斯くもかなしき天の使者なりかなかなは

人の一生は、さまざまな困難と別離に耐えて己を演じ続ける一場の劇であると云う。とすれば、春の虹もかなかなの声も哀しい己を癒す自然からのエールなのだろう。

網野月を

生きるとはマスクに隠す穴三つ
山笑ふつられて空と海と君
血を分けた兄弟分の蚊を逃がす

ユニークな視点と巧みな措辞で読者を魅了する作者の真骨頂の三句。「マスクに隠す穴三つ」「つられて空と海と君」「血を分けた兄弟分」とは、よくぞ言ったり。「俳句は音楽だ」とは先人の言。読者の意表を突く作品の数々は、音楽研究家たる作者の感性の発露なのかも知れない。

四分の三生きたと思ふ桜待つ
春の雨実家は更地に風の末

颯爽として若々しい作者にも、歳月は静かに忍び寄る。人生の四分の三は残りの四分の一のためにあるのかも知れない。

気がつけば故郷の姿も随分と変りましたね。

丸山マスミ

頬被解いて小昼を木挽小屋
簗守の爺を慕ひて瀬に立つ子
鈴を振る確かな歩幅秋遍路

天明調の詩情豊かな「マスミ俳句」の中の爽やかな旅吟の三句。重労働の木挽小屋のお八つには腹の足しになる饅頭や焼餅などが出され、「小昼」と呼ばれた。川瀬の簗を守る老人と傍を離れぬ小児の姿が青空に映える。足弱の連れをいたわりつつ畦道を行く秋遍路に幸多かれと祈らずには居られない。

上弦の月きりきりと寒に入る
雲海の音なき怒濤主峰呑む

「俳句は瞬間の写生」を体現した作品である。きりきりと絞られた上弦の月はいかにも寒々しく、寒の入にぴったり。雲海が音もなく主峰を呑みこむ様は優れてドラマチックだ。

大場順子

試着室のうぬぼれ鏡春隣
しろがねのイルカに触るる薄暑光
星飛ぶや馬車がかぼちやに戻るころ

作者のメルヘンチックな作風は読者を魅了して止まない。「試着室のうぬぼれ鏡」とは言い得て妙。「しろがねのイルカ」は『イソップ童話』の一場面を彷彿とさせる。「馬車がかぼちゃに戻るころ」にはシンデレラ姫も満天の星を仰ぎ、流れ星に儚い望みを託したに違いない。

初時雨水の匂ひの大原女
三月来勾玉色の風連れて

初時雨に濡れた大原女の美しさや希望に満ちた三月の到来がみずみずしく詠まれている。作品には音、色、香りなど五感を鋭敏に利かせた句が多く、水明新感覚派の一角を成す。

野口和子

掌に余る秩父の蜂屋柿
初午祭ラジカセを手に宮司来る
馬の子と話したくなり回り道

鬼石町の四季の移ろいを細やかに詠みあげた作品群には、一篇の抒情詩に似た豊かな味わいがある。蜂屋柿は秩父特産の大型の渋柿で、ぽったりとしたあんぽ柿が作られる。雅楽を仕込んだラジカセを手に各戸を回る宮司の姿も、子馬を見るための回り道も微笑ましい北関東の風景である。

春灯し二階に点かぬ子供部屋
解体の明治の旅籠街薄暑

子供が巣立った二階の部屋には春灯も点かず、淋しさが募る。街に遺っていた明治時代の旅籠屋も取り壊され、古き良き時代が次第に遠ざかるのは詮無いことだろうか。

余韻

島津初花

境　延昭

春の虹足の一つが柳橋
さくら貝硝子の瓶に異国文字
草笛や土手を親子の肩車
春の塵色とりどりの酒の壜
激流を富士めざすかに上り鮎

長閑な春の景色が童話のページを繰る様に眼に飛び込んでくる。柳橋の袂に虹の片足。と言った表現に驚いた。
さくら貝の入った小さな瓶は異国土産のもので、子供達は宝物として見せ合いをして居る。何処からか草笛が聞こえてきた。耳を預けていると肩車の親子とすれ違う。
ひとときの散歩のコースを過ぎ帰りの道すがら酒屋があって色とりどりの空ビンが目に止まる、それは春の塵に同然と苦笑している作者なのだ。

栢尾さく子

幻日や紫苑の中で立ち暗み
直立のつま先揃ふ彼岸花
覚め際の耳もと溢れ蚊に鳴かれ
古甕に見合ふ野稗の穂を探す
陰翳の濃き城跡の彼岸花

際立って咲く彼岸花。まるで手品師が咲かせる花の様に、彼岸の日にぴったりと合う。しかもお行儀よく立ち揃う姿は自然の不思議とも言える。
秋の蚊が耳元に取り付くと、眼が冴えて寝覚めの悪い朝になった。気分を晴らそうと秋の野に出て古甕に似合ふ穂を探す。紫苑の紫が映えて花材が整ったようだ。

矢作水尾

纜の張り見る漁師初嵐
秋めくやフォークダンスの手のぬくみ
一塔の暮るる山影法師蝉
白粉の花や素朴に生きて来し
職退けば都心は遠しはや晩夏

夏も終りに近づくと、台風の様な風が吹き、海辺では、漁師の急かるる姿が浮ぶ。秋は運動会。コロナ禍で行事は縮小また中止もあった。フォークダンスに友の手の温みもなつかしく思い出される。

白粉花は「夕化粧」と言われるのは、午後四時頃から開花するからだ。お家生活に入られ外出の数も少くなり都心はますます遠くなるばかり。

梅澤佐江

耳底に残る旅寝の河鹿笛
片蔭は加護とも寺の築地塀
脱ぎしより追憶纏ふ絽の喪服
松籟に水音の和す夏座敷
指物の欄間に気品夏座敷

身近なお人の供養のお参りの日は暑い日の様だ。大きなお寺の庭園の水の音。河鹿の声を聞きながら、ふと天井に目をやると立派な彫り物の欄間が見事であった。

絽の喪服を脱いだ時の開放感が手に取る様に伝わってくる。同時に故人への追憶が松籟と和合して句の中に滲み出ている。

近藤徹平

濃紅梅マンション街の辻社
初虹の見ゆる独房格子窓
燕来る朝縁側の雑記帳

紅梅が街中で咲くと、周辺は香わしく、紅色が窓に映って神神しい。窓から眺めていると燕がやって来たのだ。

木の芽風白いドレスのブーケトス
草千里天地を焦がす野焼の火

結婚式の日、新婦の持っていたブーケを後向きで投げ、これを受け取った未婚の女性に幸運が届くと言う。春に先駆けた幸せな一場面を見た。草千里の野焼は、壮大な大地再生の瞬間だ。日毎に近づく春の訪れを句ごとに詠まれている。

保坂翔太

初紅葉リュックに付けし鈴二つ
安らぎし祖父母の訛り零余子飯
お手玉を教ふる嫗木守柿
ひとり居の日合の酒や十三夜
伝説の鏡ヶ池と龍田姫

遠い日、祖父母と食べた零余子飯は、その味、顔や声までも、思い出されるふるさとの味なのである。

またお手玉が上手だった嫗にも長い間逢っていない。木守柿が思い出す手掛りになったのではないか。

毎日楽しむ日合の酒は、十三夜の月見にとビンを翳して、確めて居る作者が浮ぶ。

月を眺めていると、幻の世界へと引き込まれ、しばらくすると消え去る。たしかにあれは龍田姫であった。秋の女神様に逢った作者なのだ。

実千両

星野和葉

椎野美代子

モンローの唇ほどや石榴笑む
石榴割れる村尋めゆく師に逢はむ
訪へば石榴笑つてゐてお留守

モンローと石榴の取り合せ、形からみれば納得。艶という面で正反対なのが面白い。「石榴割れる村お嬢さんもう引き返さう」紗一。その村を尋ねた紗一、お嬢さんになったつもりの作者。それは無理、明世さんが声高らかに笑っています。

三月の樹の瘤かな女の髷に似て
三月来くつくつ笑ふ酵母菌

びっくりする様な樹の瘤に出会う。かな女を恋うとその形に見えてくるのだ。「酵母とはもしか私か桃の花」明世。やはり明世さんは笑う。今度はくつくつと。

鈴木康世

物語の羽衣の松しぐれけり

小春日の富士寛ぎてゐたるかな

羽衣伝説の三保の松原。作者はこのあたりにお身内のどなたかがいらっしゃる様で富士を良く詠んでいる。それ故、富士の様子が分かるのだ。寛いでいるのは作者ご自身かも。

枇杷の花時に弱音の独り言
老いの身の老いを楽しむ老の春
自然治癒力信じ今年の大福茶

独り言を言ってから弱気を感じる。たまにはいいだろう。老が三つも入る一句、でも楽しんでいるとは前向きでいい。そして、福茶を飲んで自然治癒とはすごいです。お元気で！

小倉倭子

紅葉山へ突つ込んでゆくマイウェイ
急かされて急かして歩く年の暮

我が道を行く、いいですね。年の暮だから致し方ないが、「急かして歩く」がすばらしい。見習いたいです。

寒月へ心の弓矢射る構へ
禁じられし恋の回顧や寒月下
いつの間に時は移ろひ春の虹

意味深な心の矢は勿論射ったのでしょうね。凍る様な月の

下、昔の甘く塩っぱい恋を思う。あの時も同じ様な月だった。時の流れは早いものです。春の虹でほっとします。

原田想子

親鳥の巣立ち促す声の艶
のどけしや大樹に鳥語こぼれけり

親鳥の愛と懸命さ、ためらっている子鳥の仕種が目にうかぶ。無事に巣立った事でしょう。以前、樹の下で囀りを浴びるという経験をした事があります。心身共に軽くなります。

郭公の気合に目覚む村の朝
再会や心にたんぽぽひとつ咲く
吾が至福冷奴にてふはり酔ふ

郭公の声に目覚めるとはお元気な証拠、たんぽぽを心に咲かす再会も。冷奴で酔える事を至福と言い切る。すばらしいですね。「ふはり」がいいです。

松井由紀子

枝先に鋼の光冬木立
穏やかな地熱ありけり冬木立
ぐい呑みに赤絵とり出す十二月

葉を落として寒々とした冬木立、枝先は鋼色に、そして春の芽吹きのために地熱は木立を守る。こんな冬木立を過った後は、赤絵での一杯が何とも言えませんよね。

どこからか嬰の声する月夜かな
冬満月零れくるものなにも無く

嬰の声の句からすぐに竹取物語を思う。翁に育てられたかぐや姫が、何もかも振り切って八月十五日夜、月の世界に帰る。今日の冬満月はいつになく暖かく感じた。

曲淵徹雄

影おとす沼さ緑に夏木立
沼薄暑朽ちかけてゐる丸太杭
禅堂の魚鼓を打つ音今年竹

若葉の緑色が沼に映り沼辺も明るい。何に使った杭だろうか、朽ちかけてはいるが夏に向けて新しくなる予感。魚鼓を打つ音は若竹に響き音も若々しい。

鳴く亀を彫らせてみたし甚五郎
薄氷にためらふ鯉のみそかごと

眠り猫を彫ったといわれる（確証はない）甚五郎に鳴く亀を彫らせたいという発想が楽しい。薄氷に上がるのを躊躇っている鯉、もしや恋のみそかごとが隠れているのでは。

追　憶

松宮保人

茂木和子

袖垣に茶の花咲かす保育園

茶の花は、気を付けてよく見ていなければ見落としてしまいそうな地味な花であるが、よく見れば黄色く大きな蕊と白く円やかな花弁からなる清楚で清潔感の漂っている花でもある。保育園を囲っている袖垣の向うには無垢な園児達が小春に遊んでいる。

手を打てば寒林の気に罅走る

冬の朝の公園であろうか。空気が乾燥して凍えるほどの寒さである。手を叩けば、冬空にひびが入る程の音量が増して身が引き締まる思いだ。

耕人を夕日バックに写しけり
急ぐなよ桜ちらしの雨もよひ

花の命は本当に儚いものである。花芽が膨らみ始めてから開花するまでは、未だか未だかと待ち遠しかったのだが、満開を喜んでいるのも束かぬ間、風雨には無防備な桜は散ってしまうのである。これが桜花の風情なのかも。

山中みどり

荒東風やきりきりと鳴る舫ひ綱
初蝶の縺れ離れて涅槃塚

涅槃塚とは私なりに単的な解釈をすれば、共同墓地の辺りであろうかと思うのである。春暖かくなってきた頃、初めて見る蝶の番であろうか、戯れながら飛んでいる。穏やかな春の日の霊園風景である。

丁度良き二人の歩調秋の虹
軒先のランタン揺らす霧の音

初秋の雨後に現われる虹の元、夫婦仲睦まじいウォーキングの情景が目に浮ぶ。互いに話しながら歩いていると気が付いた頃には、最早虹は二人の視野から消えていた。

柚木治子

楷書めく神技に喝采梯子乗り
春愁や憑かれたやうに打つ鼓

江戸の火消しの伝統を伝える妙技は、出初式の後に披露されるのであるが、動作がきびきびしており神技に近い演出に思わず観客は驚嘆の拍手喝采を贈るのである。

冷奴はさむ螺鈿の若狭箸
ＳＬの汽笛の余韻谿紅葉

私は今、山間谷間を電車で旅をしているのであるが、間もなくトンネルに入るであろう。思えば何十年前のことであろうか、ＳＬ列車でこの渓谷を走った記憶がある。谷紅葉を眺めながら私は、列車がトンネルに入る前の警笛が聞こえるよ

うである。

井口俊晴

耳当てて幹の鼓動を冬木立
散策の帽子目深や春寒し
伊豆の旅山葵に噎せし山の宿

伊豆の天城山地はわさびの里である。旅の宿ではわさびを使った料理が盛り沢山出てきたことであろう。わさびに噎せたのではあるが、旅の歓びと宿の料理に対する歓びの余り噎せたのではなかろうか。いずれにしてもわさびの風味は食欲をそそるのである。

生ききつた天に腹向け油蝉

油蝉の生涯は、地上で羽化してから約一週間程の儚い命であると言うイメージがあるが、幼虫時代六年ぐらい土中で暮し、成虫となってから短い間で渾身の力で鳴き相手を探し合う。最後にメスは木の皮などに産卵し、子孫を残すための大仕事を成し遂げて一生を終るのである。油蝉にして見れば大往生なのである。

正木萬蝶

男湯にひびく亭主の大嘘
山ひとつ枯れて木霊の吹きだまり

旦那さんと久々に温泉にでも浸っている情景だろうか。隣の男湯は天井が通じていて、大きな声や音は響き聞こえてしまう。まして大くしゃみであれば、他の客が居ても何時も聞かされているくしゃみであれば、旦那であることは直ぐ判ってしまう。第三者がその場に居たならば滑稽な場面である。温泉に来て風邪をひかないように。

心地好き君の口下手星祭
流星やふたりの周りだけ無音

初秋の澄んだ夜空が見える港であろうか。そぞろ歩きの人達の声があちこちに聞こえる。夜空には流星が絶え間ない。だが、私達の周りだけは別世界に居るかのように静寂感が漂っている。お互いに信じ合える二人であるからだろうか。

原田秀子

炭の尉そつとそのまま春隣
山神の笑窪愛らし山笑ふ

春はもうそこまで来ているのだ。炭火の炭の継ぎ足しはもう要らないだろうが、炭火の白い灰もそのままにして置こう。山笑うとは春の山の明るい感じを言うのであるが、尊い神を擬人化して、山の神の愛らしく微笑んだえくぼと捉えて表現しているのである。全くユニークな発想である。

真つ新なベッドシーツや夏きざす
絵日記に飛白のもんぺ敗戦日

今年で終戦七六年になる。家の片付けをしていた際子供の頃の絵日記が出てきたのであろうか。それは家業の手伝いをしていたもんぺ姿の自分なのかも知れない。戦中戦後の女性の作業着と言えば専らもんぺであった。令和の今日では高価なかすりのおしゃれもんぺが店先に並んでいる。

玉手箱

柚木治子

吉住光弥

居る筈もなき「かあさん」とよぶ夜寒
纏ひみる古セーターの歳月も
残生や下萌に身の青みたる
三月(たがやし)や納屋の鋤鍬ひかりだす
耕人(ひと)先づは畏敬を天と地に

寒い夜、何故か亡き母に会いたくなります。この句のようにお母さんと呼ぶだけで良いのです。断捨離の最中、手を通したセーターは沢山の思い出をつれて来て、捨てるのにすてられなくなってしまったのです。水明の重鎮であられる作者の無垢の心を垣間見させていただきました。

最後の句は、農一筋の人を畏敬をもって詠まれて見事です。

田寺玲子

海峡に鳶の輪二つ寒入日
桜鯛へ移り囃声いちだんと
青鷺や水面に暮色ひろごれる
黒南風や浮灯台の定まらず
緑蔭へ巫女黒髪を解き放ち

明石にお住いの玲子さんには、海を詠まれた句がお似合いです。寒中の入日は寒さゆえに一年中で一番美しい赤に染まります。その夕映えの海峡を舞う番の鳶が俳句を引き締めています。立ち合ったことは無くても、今日一番の囃が始まる瞬間が感じ取れる句であります。暮色ひろごれるで、青鷺の哀愁ただよう背中が見えてきます。〈定まらず〉で灯台船を見つめている作者の心のゆれが分かります。

石井喜恵

ウインドーに硝子の靴やクリスマス
指切りの指の湿りや春の闇
鶯や指でなぞりし道しるべ
悩ましきてにをは切字初句会
針に糸すんなり通る蝶の昼

日常の中に隠れている虚をすくい上げ、クリスマスという季語で一句を完成させた技巧はさすがです。本能を呼びさます魔物が潜むと云う春の闇を指の湿りで詠み上げた情緒たっぷりの句であります。一時間も二時間も悩み、ぴたりと決っ

た時の嬉しさは言い様がありません。最後の句は、年を重ねて解るよろこびの一つ、蝶の昼で詩に昇華しました。

井上燈女

枯芒だまされさうな道の中
読経の中へ中へと鉦叩
試歩の杖足ふん張つて花野行く
冬至粥母息災の影曳きて
大根干す母ゆつたりと時を待つ

枯芒の妖しさを、だまされさうなと詠まれて巧みです。だまされなくて良かったですね。私は仙石原でだまされました。鉦叩と自分が鳴らしている音が一体となる無我の境地を「中へ中へ」のフレーズで簡潔な奥の深い句となりました。花野でリハビリが出来るなんて、秋の草花にはげまされてすぐにお元気になられたことでしょう。母上の立居を影で詠まれて一段と情感あふれる句となりました。

松宮保人

寄り添ひて土に生きるや彼岸花
瑞鳥の飛び来る郷や初御空
舟小屋の崩れしままや梅の花
黄熟の其処だけ不思議麦の秋
鍬揚ぐる案山子親爺に酷似して

彼岸花に託して農業に生きる夫婦愛を詠まれている一句目見渡す田圃に炎となる彼岸花が二人にエールを送っているようです。何度か訪れた鳥羽谷は、たしか山笑う頃だったと思います。あの郷ならば瑞鳥も舞い飛ぶことでしょう、屏風絵を見ているような一句です。さびれた舟小屋と毎年忘れずに咲く梅との取り合わせが人生を想わせます。

野田静香

もう一人の我を励ます初鏡
風渡る紫雲英の果てのちぎれ雲
羅の人囁きぬ桟敷席
禁色に輝く桔梗朝まだき
決勝に挑む朝や鵙哮る

二句目〈果て〉のことばで画面が動きちぎれ雲がアップされます、まるで映画を観ているようです、苦心されたことでしょう。早朝の桔梗をその昔、殿上人以下は使えなかった禁色と詠み高貴な一句となりました。力強い俳句を読ませていただき、令和三年度の水明賞を受賞されたのもうなずけました。おめでとうございました。

句集喝采

近藤徹平

◆吉原文音（あやね）「海を詩に」

東京四季出版

著者略歴　昭和三十九年広島県生。同六十二年「さいかち」入会、田中水桜に師事。平成十四年退会。「太陽」創刊同人、務中昌己に師事。令和三年柴田南海子より主宰継承。「風の翼」第二句集既刊。

杉の爽籟　橅の爽籟抜け天籟
山の青垣　雲の八重垣小鳥来る
詩の糧は薔薇音楽の糧は海
絵硝子のごとき夕空夕焼波

著者はあとがきで言葉が詩に昇華する迄胸にあたため一行詩に紡いでいきたいと記す。第一句、第二句ともに大きな景を詠んで見事。第三句、俳句の他に評論、評伝、声楽でも活躍の片鱗を見せる。第四句、読者を幻想的な世界に引き込む。

町ひとつ河原と化しぬ出水あと
花衣着せて柩は花の舟
花ミモザ柵にもたれて海を詩に
風涼し太陽仰ぐ詩の円居

第一句、平成三十年西日本豪雨により自宅のある広島県坂町が被災。第二句、翌年著者の長女が難病で若くして他界。第三句は標題句で長女の愛した横浜港の見える丘を次男と訪れた際に詠む。句集巻末の第四句は自身に起きた悲劇を乗り越え「太陽」主宰を継承し、結社二十周年を記念する句。著者が詩と呼ぶ俳句と声楽との両刀遣いで更なる活躍を期待。

◆植田いく子「水でいる」

喜怒哀楽書房

著者略歴　昭和二十三年福岡県小倉市生。平成十五年「山河」入会。同十八年「山河」同人。同二十七年神奈川県現代俳句協会賞受賞。

松井国央「山河」前代表が序で「今と言う背景・染みわたる清潔感」と題して著者の句の精神性に着目して論じている。

薄氷の一歩手前の水でいる
八月の水を汲んではまた零す
一月の明朝体は父であり
未来より過去が不確か冬の霧
同意するまた同意するさくらんぼ
会えない会わない黄金週間
芹の水未生の我に会いに行く

第一句は標題句で、雑報を真実と誤解しがちの世の風潮に流されまいとする信条の句意。第二句、戦中学童の筆者は戦死した親族の墓に水を掛ける句意と解するが戦後生れの著者は如何。第三句、男社会を生き抜いた尊父への敬愛の念が滲む。第四句、歴史は勝者に都合よく編纂されるので過去が確かの保証はないとの慧眼に敬意。第五句、以心伝心ではなくお互いに語り合って確認しよう。第六句、会って語り合う機会を奪った昨今のコロナ禍に深い恨み。第七句は巻末句で、「未生の我」とは余生でも新たな事象に真摯に向き合おうとする著者と解するが如何。著者の「水でいる」精神に期待。

山本鬼之介　選

水明集

編棒の先が対話の文化の日　熊谷　神田治江

玄関の幸あれかしと注連飾る

弁天のみはりてゐたり神無月

さりげなく訣れし影の冬初め

くさめして夜の外出とどめらる

廃線の鉄路をあやす草紅葉　さいたま　曲淵徹雄

手と眉に秋思あふるるフラメンコ

秋さびし画鋲の残る掲示板

八州を天翔りける竜田姫

そそくさと連れ立ち旅へ屋敷神

どこからも下校子見ゆる刈田道　さいたま　本橋稀香

吹き晴れてコスモスどつと踊りだす

転びざまゆつくり団栗見てをりぬ

血縁も地縁も薄く虚栗

きつちりと干し物畳む菊日和

水分神（みくまりのかみ）は川路を神の旅　平塚　丸屋詠子

アンデスの楽器の調べ冬の暮

冬蜂が脚を踏ん張るバスの窓

広重の描きし宿場や山眠る

星座図を手許に置いて冬の星

一村は夕映えのなか懸大根　上尾　横山君夫

神の旅沖に兎のあまた跳び

一湾は巨大な鏡神の旅

掛茶屋に女人の杖や冬紅葉

無住寺の庭のあをぞら冬紅葉

敬老日訛ほどよきおけさ節　さいたま　保坂翔太

秋澄むや凪の彼方に安房の国

公転と自転の神秘星月夜

天高し紙飛行機が旋回す

分校へ通ふ吊り橋蔦かづら

時雨るるや浅草六区に絵看板
継ぎ当てのズボンの記憶空つ風
時雨るるや戸口に掛かる蓑と笠
凩の電線唸る無人駅
頬紅の姉さん被り大根干す

さいたま　染谷正信

ほの匂ふ新（さら）の障子や割烹着
敷石に黒点印す時雨かな
空つ風字（あざ）の消えたる吾が故郷
谷川の水面を染めて散紅葉
初めての花や実生の冬椿

反町　修

女子会や見下ろす街の片時雨
観覧車しぐるる中を回りをり
赤松の幹赤あかと七五三
紅葉散る出世稲荷の油揚げ
雷電や信濃は深く山眠る

橋本京子

茶の花や母の生れし藁葺き家
茶の花や農家カフェへと誘ふ道
天辺の五枚を残し柿落葉
太陽とハグして踊る小春日よ
冬晴や訪ぬる友は千の風

渋谷きいち

冬の早朝飛翔の鳥に意気高く
畑野菜めきめきめきと冬ぬくし
膝に来ていびきかく猫今朝の冬
小刻みに震へる犬や初時雨
秋深む「ふるさと」の詩を呟きて

さいたま　西幅公子

しぐるるや汽笛遠のくトラス橋
落葉籠丸字のごとく猫眠る
小夜しぐれ暖簾わけたる顔赤し
山門の仁王が睨む散紅葉
裏門を潜れば頬り紅葉散る

村杉清吉

落鮎や連山の雲はやかりし
掃除ロボに猫が飛び乗る文化の日
小春日や気の向くままに試歩の杖
三毛猫がヨガのポーズや庭小春
名刹や濡れて冬めく百羅漢

笹本啓子

小夜更けて落葉の音を聴く欅
産土の笑ふ「楯持埴輪」冬うらら
麓より寺の石段石蕗の花
晴れやかに裾野ひく富士文化の日
連れ立ちてモネマネゴッホ冬麗

東京　鈴木和子

千万の神神忙し神無月
庫裡深く忘れ箒や石蕗の花
神無月色付けを待つ白達磨
ソリストの愛しき笑顔文化の日
神の留守銀のクルスに願ひこめ

高崎　原田秀子

足早に暮るる山の端冬桜
そこかしこリモート会議神無月
どの家も母は逞し石蕗の花
裏窓に星の煌めき霜の声
霜柱土の帽子を被り出づ

熊谷　越田栄子

早暁の凍雲の海夢捨てず
姐さんの襟足白く冬めけり
無音無風ただただ枯葉ハラハラハラ
葬送の赤きつつじの返り花
喉までのことばたたみて帰り花

さいたま　梅澤輝翠

小春日や二駅歩き万歩計
聞き上手話し上手や掘炬燵
小春日や芝生に並ぶ豆画伯
冬晴や飛行機切り裂く青天井
寂聴の法話に合点する小春

新　暦文

梵鐘の里つつむごと雁渡
茶柱のななめにたちて秋なかば
さやけしや門に一礼退職す
澄む秋や峰を跨げば甲斐の国
枇杷の花無住の寺の新仏

若　狭　檜鼻ことは

木枯や真白き紙垂の千切れをり
陽ある間に呑まねばならぬ酉の市
中ほどの熊手求めて帰りけり
凩に缶蹴りの音吸ひ込まれ
凩や書棚の奥の「春と修羅」

さいたま　元田亮一

マンションの狭間を照らす石蕗の花
山茶花のひとひらごとのケセラセラ
とどまれど落つるほかなき枯葉かな
枯葉舞ひ落ちゆく先の潦
猪口三杯酔ふて本音の冬の月

清水桂子

山茶花や嫁ぎし友の女将ぶり
冬めくや足長き影連れ歩く
夕陽あび散りゆく枯葉ダンスショー
枯葉舞ふ四回転を軽軽と
冬ぬくし路線バス待ちストレッチ

菅原真理

焚火の音聞きて独りの世界かな
茶の花に有刺鉄線とは野暮な
きりきりと舞ひて落葉の下り坂
星月夜木々の影さへ静まりぬ
止り木を立ちて酔ひ覚め星月夜

さいたま　新井孝麿

朝寒やリード緩めて走り出す
乾拭きのサドル気の急く霜の朝
コロナ禍の鎮もるらしや衣被
三味の音の洩れ来る垣や秋深し
そのうちと別れて会えぬ雁来紅

加藤でん治

時雨去り後光さしたる地蔵様
日本橋旅人渡る時雨かな
目を細め見守る祖父母七五三
字幕読む無声映画や秋深し
大字は江戸の集落秋の空

千坂平通

故郷に心残して神の旅
人の世のたつき眺めつ神の旅
瀧の音細くなりたり冬紅葉
手をつなぎ親子で歩む冬暖
菊花展菊で築きし榛名山

春日部　仲田利子

秋夜長議論を交はし喝破せり
裏山の枯葉は乱舞風のまま
酔芙蓉満開誇り破顔かな
冬うらら三毛猫の尾がゆらりゆら
冬うらら曲り屋できく「座敷童子」

さいたま　山岸久美子

冬めくや荒川線の街景色
冬めくや絵馬に託して二語の文字
冬ぬくし都電通過に手を振る児
せみ塚のうすき字に触れ冬ぬくし
街角の寸劇にわく午後の秋

竹澤和子

依代は高きが宜し神の旅
燁割れし阿吽の相に冬紅葉
緑道の川面たゆたふ冬紅葉
野火止に武蔵野偲ぶ冬紅葉
足裏に枯葉を纏ふ雑木林

春日部　諏訪サヨ子

神の旅お国自慢の土産提げ
古本の市に枯葉の栞かな
小春日に破れ帽子の寮歌祭
日の丸の折り目の黄ばみ文化の日
山茶花の千千に咲きたる一里塚

伊奈　菅原卓郎

黄葉し並木に風を呼ぶ欅
大東京をからからからと枯葉行く
工具屋に枯葉舞ひ込む昼下り
山茶花や向かひの家の娘たち
障子戸の破れ繕ふ葉影かな

越谷　阿部幸代

菊坂の旧居に石蕗の花明かり
漱石の愛でし箱根路石蕗の花
朝日さす鳥居の陰や冬めきぬ
落としたし悔ひの数々落葉踏む
煎餅の手焼体験冬隣

草加　外村紀子

長き夜や寝息に覚むる四人部屋
地滑りの深き傷跡初紅葉
山茶花の空き家なれども咲き出でぬ
母逝きて沢庵漬の桶のこり
早朝のからす騒がし神の留守

若狭　山﨑郁子

小春日や小さき花壇を植ゑかふる
小春日や大道芸に足を止む
茶の花に触れて茶摘みの歌唄ふ
余生なほ見聞多し日脚伸ぶ
冬晴や無縁仏にマスクせり

さいたま　篠﨑紀子

夫恋し吾子も恋しや冬銀河
冬銀河娘交へて仰ぎけり
幼子の風邪気味なれば葛湯かな
水割に旅のみやげの酸橘かな
氏神を統合すると神無月

杉戸　佐々木史女

冬晴や見覚えあれど遠会釈
冬晴や左右たがへてイヤリング
茶の花や一枝手折り花所望
茶の花やインド娘の額の紅
暮れ初めて猫帰りたる小春かな

さいたま　池田珪子

大根のつまのシャキッと小料理屋
透明になりて味浸む大根かな
小春風銀輪ゆつくり当てもなく
境内の黙に夕陽と石蕗の花
小春日や引かれし浮きを見逃せり

斎藤みよ

後継ぎの絶ゆる深山の初紅葉
石蕗の花門前の猫腹を見せ
茶の花の垣根を守る建仁寺
散歩道泥大根を手渡され
冬浅ししばし悩める衣桁前

伊予　向井章子

自転車の大根の葉のふさふさふさ
そこここに手締め手じめや酉の市
黒塀の黒濃くなりぬ袖時雨
地下道へ急ぐ人の背夕時雨
寒暮かな木星土星月金星

さいたま　小林京子

寒暁の服せし白湯を拝みけり
木枯や保温肌着の下ろし立て
デイサービスを出て冬晴の青さかな
冬帽を被り物干す妻の留守
冬鴉一声落とし風に乗り

和田仁八郎

冬めくや涙目になる向ひ風
一寸の間姿あらはす冬の虹
冬めくや心身ぬくむ鍋料理
冬ぬくし亀一列に甲羅干し
早割りやいと忙しなき歳暮時期

小川洋子

背で聞く夫の小言の無き夜長
物憂げな初冬の雲や空低く
坪庭に残りの月を独り占め
脇役にするには惜しき黄白菜
コスモスや独り籠もりの慰めに

和歌山　嶋田洋子

草の実は勲章子らの探検記
編み上りまで持つやこの恋冬隣
駅そばの湯気とだしの香冬隣
才妬む心は老いず翁の忌
初霜に草野は夢野朝ぼらけ

吉川　杉浦理恵

傘寿まで一日一書文化の日
常温の酒に新海苔二三枚
城跡の天守に降るや紅葉雨
茶の花や吾子の瞳に恋の色
黒猫も人恋しがる秋深し

さいたま　鈴木藻好

潦枯葉一葉受け止めて
枯葉散るシナトラらしき人来る
けつまづき破顔一笑小春空
なにごともなくいつのまにやら八ツ手咲く
なき彼と巡る山路や秋のさび

飯田忠男

覚えなきノートの付箋神の留守
凩が回転ドアを攻めあぐむ
駅ひとつ手前で降りし秋うらら
うどん屋のおまけのあられ秋うらら
杭打の重機響動もす芒原

森美枝子

喜びてバレンタインの日のリボン
三拍子入江の向かひ春の海
うらおもて無くてのびゆく春の風
あえかなり城下の天へ蝶ひらり
波を聴き風に抱かれ桜貝

所沢　関根千恵

神無月隣の女もひとり旅
ピアニストは盲目なりや神無月
案内の女将加賀弁石蕗の花
石蕗咲きて取壊されし生家かな
黒髪に戻す娘や神無月

東京　飯室夏江

初時雨公衆電話に人の影
時雨月オープンカフェの畳まるる
枇杷の花知れることなく樹下を過ぐ
マンションの窓一面を冬茜
冬うらら日向へ運ぶ母の椅子

さいたま　岡田宣子

ひよいと来て手摺に止まる赤蜻蛉
冬近し持て余したる肩の凝り
秋しぐれ百円傘の有難み
渋柿や想ふ彼の日の奥会津
秋寒や息にくもりし老眼鏡

水野興二

酉の市一杯機嫌の締めの声
一声に占ふあした酉の市
木枯や酒に仮寝の炬燵掛け
凩や落ち葉舞ふ道家とほし
初冬の駅長独り所在無し

草加　持永喜夫

秋晴や空空空の行脚僧
発心寺膳に典蔵の柚子一片
愛の羽根チルチルミチルの青い鳥
奥山の和尚の木魚とけらつつき
里海へ七曲りしてけらつつき

小浜　松島寛久

鎌倉をまるごとぬらす初時雨
改札に友の笑顔や初時雨
山茶花の紅がまぶしき朝散歩
気に入りの枇杷の花咲くカフェテラス
本屋街夕風に散る枇杷の花

さいたま　木村るみ子

難民も羨ましかろ鳥渡る
定位置に母座す奇跡今朝の秋
返り花母の病室三〇二
日常へ戻る幸せ帰り花
ひと月の留守に混みあふ庭の菊

山戸美子

冬銀河シャンソン低く歌ひをり
冬銀河肩ふれあひてたぢろぎぬ
彩雲に白山茶花の散りゆきぬ
灯影なき里の「よろず屋」紅葉散る
鵯の啼きゆく方や朧雲

さいたま　霜多光代

コーヒーの香の充ち充ちて冬うらら
陽の当たる道を選びて落葉舞ふ
掃く度に落葉の嵩に驚きぬ
お隣りの猫も安らぐ冬うらら
昼食に陽射しも馳走冬うらら

遠西勢津子

枯葉舞ふアッピア街道カンツォーネ
冬ぬくし準備万端草木染
一人行く旅早朝の冬の海
晩秋や湖面の波紋藍の色
紙破る吾子の遊びや冬うらら

野村美子

秘めごとを知りゐるやうな枯葉かな
郷里も海をもたざり冬ぬくし
着古してセーターなじむ顔となり
冬帽を左目深に洒落てみる
この世です理不尽はあり狂ひ花

川田政代

模様替へ部屋の奥まで小春の陽
まるつこき茶の花咲くや庭の隅
茶の花やひつそり蕊をこぼしをり
冬晴のひと日選んで六本木
冬晴のパルコ遠くに富士のあり

さいたま　鳴海順子

思ひ出の栞に今日の冬紅葉
温暖化か色くすみたる冬紅葉
当てもなく彷徨ふ小径冬紅葉
抱へたる犬の体温冬来たる
誕生の熱き報らせや冬立てり

北出久美子

自販機に炎のマーク冬に入る
冬暖か栄一忍ぶ飛鳥山
百葉箱に真紅の枯葉二三枚
心急く門の枯葉を掃かねばと
冬めいて木綿縞なる半てんを

さいたま　森下美智枝

酉の市手締めの音の響き合ふ
淡々と日々暮らしをり秋深む
段々畑健気に咲くは茶の花か
生垣に郁子の実しつかと存在す
われの欲どこまでふくれ星月夜

東京　畑宮栄子

ゆつくりと実る楽しみ枇杷の花
枇杷の花北限の地に香りあり
襟を立て急ぐ足音初時雨
初時雨杉の枝枝音を立て
万両や小さきお日さまつぎつぎと

さいたま　小駒さち子

殻の内虹を隠して牡蠣黙す
風強しグラタンの牡蠣ぷつくりと
加速する新幹線や雁渡し
亜米利加の森から来たる松茸を
新豆腐有機国産無添加と

東京　山中いちい

山茶花や母亡き部屋に日の入りて
金の葉を纏ふ銀杏の社かな
赤子見てただただ嬉し文化の日
刺繍刺し無心になりぬ文化の日
錦繍を纏ふが如く山粧ふ

さいたま　石浜悦子

木枯や母乳(ちち)飲ます部屋の静謐
凩やマラソンマンの息速し
凩や田園越しの赤城山
オレンジの店の灯りや酉の市
亡き父の丹精し庭帰り花

橋爪さなえ

小春日やコロナ忘れてランチ会
枇杷の花葉陰に鳥の遊び居り
酒好きな友の忌日や初時雨
街灯のひとつ瞬く初時雨
文楽の切場語りや秋闌くる

さいたま　綿貫ひさの

滔滔と川は海へと神の旅
狛犬の今朝の眼力神の旅
神の旅宅配ピザの届きけり
庭梯子妻が支へて小春かな
会釈され名前浮かばず小春の日

森　和子

初冬や信州山奥一茶伏す
みかん剥く姉の横顔母に似て
初冬の旅初冬の湯治なり
海風を受けみかん山輝けり
初冬の空真昼の細き月

山下ユリ子

秋の風ジャングルジムに子がひとり
秋澄むや心を合はすピアノデュオ
艶やかな女形見返る秋祭
秋深し螺鈿浮き立つ硯箱
下り鮎悟れぬままの我が身かな

湯浅　和

夜半の秋飛び飛びに読むグラビア誌
夫の忌を修す身ほとり秋深し
久久に友と対話や小六月
小春日のベンチにひとりまどろみぬ
初冬や手芸の店の扉押す

さいたま　高原和子

気の弱り人には告げず落葉踏む
倒れ木と落ち葉寄り添ひ日向ぼこ
無住寺の落葉や清く掃かれたり
どこまでも歩き行けさう冬うらら
冬うらら「ただいま」の声ぎゆつとす

川口　新井のり子

青空へ山茶花二本咲き競ふ
水鳥や朱色に染まるビルと空
水鳥の先には古き石の橋
山茶花のピンクの模様苔の上
ぎいつぎい鳴けるつがひの水鳥や

さいたま　鈴木敦子

文化の日子ら口ずさむみすずの詩
オペラ見て聴いてケーキや文化の日
頬ほだす渚の風や枇杷の花
枇杷の花海風を吸ひ留めたり
初しぐれ庵取り巻く木立かな

秋谷風舎

ベランダで転た寝したし冬うらら
ぽつかりと白き雲あり冬日和
落葉踏み石段かぞへ社殿前
冬日和孫の歩巾を追ひかくる
路地裏は前も隣も落葉掃く

川口　田村福美

夕影の山茶花の紅零れつぐ
初冬の海晴れて江ノ電日差し満つ
夜の石蕗同期の友の訃報受く
十九の棋士竜王と冬銀河
月蝕の幻想の舟冬初め

宮代　関谷多美子

終息のコロナを願ひつつ立冬
月間天気予報早めに炬燵出す
失せ物は失せしままなり日の短か
託けて簡略にせし冬支度
熟柿落つ洗車の済みしボンネット

蕨　細井良子

大根干し「へ」の字になりて取り込めり
独り碁の音も静かや秋深し
開かぬ窓なれど小春日部屋に満つ
秋深し小庭にらみて子規想ふ
小菜園どこも大根を植ゑにけり

さいたま　川村　治

銃の如木の実の連射浴びにけり
小春日や縁に寝そべる三毛ととら
木枯や葬の花輪の定まらず
木枯にやけに捗る散歩道
灯を消してより木枯の哮りかな

東京　水落守伊

ふりしきる銀杏黄葉を子がキャッチ
仲見世の人の垣間を秋の風
文化の日下北沢の芝居小屋
新聞の広告眺め文化の日
名品の皿の落鮎化粧塩

さいたま　武田重子

一族に死別誕生落葉急
芋煮とて熱き汁椀運ばるる
菊日和婚約の孫大人顔
看護婦の熱きコーヒー今朝の霜
晩婚の理由それぞれ霜の菊

横浜　山岸弘子

太古より光り続けり碇星
カシオペアロマン広がる神話かな
碇星海の民らの目印に
掌にずしりと来るや黒葡萄
マスカットしたたる汁を児に吸はす

さいたま　後記朝香

「歎異抄」斜め読みする夜長かな
コロナ禍の露天湯ひとりちちろ鳴く
「てにをは」を迷ふ一句やつづれさせ
太陽の匂ひ籠りし干ふとん
着ぶくれて座りし席の狭さかな

さいたま　田中泰子

残菊や明日咲くつもりの蕾の黄
学童の帰りは独り金木犀
幼児の「ふふ」は平仮名小春風
植物画の壁の静謐十一月
ころころと笑ふ尼逝き花八手

大阪　遠藤人美

木枯や急ぐランチへ襟を立て
山荘のゆがみガラスに霜の華
山荘にジャズ流し初雪となる
襟巻に隠るる涙ぼくろかな
いさかひの朝のストーブ温もりて

さいたま　安藤みえこ

病床の姉の笑顔や小春の日
小春日や母の面影夢の中
世間とも離れてみたい神の旅
気合入れ神の旅立ち出雲へと
人様の願ひを込めて神の旅

落合和枝

六地蔵の間ふらふら秋の蝶
開かずの門の開け放たれて落葉掻き
女坂くだり易者の着膨れて
茶の花や金継ぎ碗の渋き色
毛糸編む他愛なきことばに乗せて

川崎　鈴木玲子

震度四娘等は熟睡長き夜
晩鐘やむかご御飯に箸すすむ
息子に植ゑし蜜柑初もぎ仏前に
カリンの実拾ひ見上ぐる空青し
食欲の秋や鳥の灸痛し

藤沢　小島喜代子

黄葉や肘と肘とで挨拶す
菊日和英検二級と弾む声
黄葉や白壁続くわが母校
黄葉や表と裏を見定むる
黄葉や黒きマスクに手を振らる

和歌山　南條きわゑ

凩やコロナの中を吹き抜けり
凩に逆らひ行くや登り坂
マスク顔無沙汰の言ひわけしてをりぬ
小なれど豊かな味のみかんなり
食卓のいつでもみかんある景色

東京　柳父はる

ロスジェネの六つ目の職初時雨
初時雨濡るるままなる逸れ鳥
あたたかきを集めほろほろびわの花
日記には善き事のみを寒昴

さいたま　横山礼子

大小の水鳥集ひ陽の恵み
水鳥のさざ波残し我に来る
おだやかに山茶花の散り母偲ぶ
生垣に山茶花の紅足して映ゆ

河井育子

酉の市午前授業のランドセル
酉の市手持無沙汰のハッカ売り
凩の居酒屋で聴くビートルズ
木枯に犬恋しくて足速め

竹内万美

今年米腹いつぱいの青い空
覗きこむ枝も美事な菊の花
口下手の笑顔諾ふ温め酒
裾長き池塘へ誘ふ月山（やま）の月

福田育子

滝壺の青に赤き葉秋盛り
新蕎麦の味きりりとす旅終ひ
マフラーを二重にしたる雨催ひ
秋深しフルートの音に身を寄せて

奥山粉雪

凩や卓にそのまま伏せた碗
凩や沙翁悲劇に寄る心
小春日の笑顔の奥に背負ふ悔い
菊枯るる書き尽くされぬ人の業

さいたま　岡田芳春

一番乗りの初登院や竜の玉
竜の玉議員あらたな衿バッヂ
今はなき故郷の墓初しぐれ
山茶花や懐かしき母の裁縫箱

和歌山　髙橋満耶子

日をあびて影ありありとつるし柿
どうだんのもみづる鬼城句碑ほとり
久々の吟行日和冬桜
ほつほつと南斜面の冬ざくら

鬼石　榊原聰子

枇杷の花羽毛布団に埋れをり
野菊晴杖の歩程合ひスマホの歩計
薄化粧薄紅差して山茶花散歩
小春日和初の曽孫は女の子

東京　河原叔子

柿落葉掃きてまた掃く在りし母
目移りし動かぬ吾子や酉の市
ま白き道雁木うれしや越後の夜
諍ひの乱れし心や夕時雨

さいたま　川島夕峰

凩や新硬貨入れ缶コーヒー
凩や水とコンロを点検す
酉の市屋台焼きそば射的かな
凩にサイレン唸り消防車

さいたま　山川　順

母植ゑし寒水仙の咲き初め
風静かすすきの束をながめ来る
どんぐりをけとばし歩く山路かな
裏庭にさざんかの花咲き初むる

鬼石　加藤ナヲ子

孫の来て腰はピーンと神無月
石蕗の花犬連れ立ちて町探検
施設の母のピースサインや神無月

さいたま　緒方みき子

初しぐれ合羽着せたしうなこちやん
信号を待つ人散らす初時雨
冬の虹けふの入日の独り言

樋口元美

あたたかや箒に伝ふ砂利の息
はしやぐたび光るシューズの聖夜かな
裸子のやたらたくさんゐる浜辺

吉川拓真

十一月号記載もれ

朝の蟬へつぴり腰のスクワット　藤沢　小島喜代子
神の前蜩最期の声絞る
庭の蛇投げられ川を泳ぎきる
濃茶点つ篠笛かすかに大文字
爺ちやんの忌を告ぐ白き彼岸花

❖原稿募集

季　音（雪・月・花）五句（巻末添付用紙）
水明集　五句（巻末添付用紙）
山紫集　一句（巻末添付用紙）
鼓笛集　三句（編集部より依頼のあった方）
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着
原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年3月号

特集 俳句は境涯の詩 ～境涯俳句を読む
○論考～境涯俳句とは何か　秋尾　敏
○境涯俳句　時代別セレクション
岩岡中正　角谷昌子　高柳克弘
○それぞれの境涯
富田木歩…福永法弘　村上鬼城…加古宗也
石田波郷…鈴木しげを　野澤節子…松浦加古
折笠美秋…大井恒行　村越化石…外山一機
○私の「境涯」を詠む～自句自解
山崎十生　鈴木節子　中村雅樹　岩淵喜代子

特別作品21句　朝妻　力

〈グラビア〉俳句界NOW　かしまゆう

特集 私の追求したい季語
安部元気　中西夕紀　小川軽舟
篠塚雅世　黒澤麻生子　中本真人

北斗賞歴代受賞者競詠
発表！　山本健吉評論賞

※セレクション結社　「篠」辻村麻乃

私の一冊　如月真菜「童子」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
芳永克彦（弁護士）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！　日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句

特別作品 長谷川 櫂・澤 好摩・櫂 未知子

3月号予告

2月25日発売

予価950円（本体864円）⑩

大特集

いまこそ旅

▼対談 俳句にとって旅とは何か…高橋睦郎×小澤實
▼論考 蕪村の旅／一茶の旅／女性の旅／虚子の旅
▼エッセイ 私と旅

特集

『角川俳句大歳時記』15年ぶりの大改訂連動企画！

歳時記の力

インタビュー：編集委員に聞く大改訂のポイント／大歳時記の読みどころ／歳時記とは何か／歳時記の歩みと特徴

第十回 星野立子賞発表！

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

俳壇

3月号

2月14日発売

定価900円（税込）

巻頭エッセイ 青木亮人

八木 健 選 滑稽俳壇

巻頭作品10句

井越芳子・尾池和夫・大谷弘至
金子 敦・辻 桃子・藤田直子
横澤放川・和田華凜

特集

『東日本大震災と詩歌 ―あの日から、明日へ』を読む

～座談会 高野ムツオ×本田一弘×平田俊子×高鶴礼子

四季巡詠33句【第Ⅲ期】…松尾隆信・長嶺千晶

新連載

色の歳時記 ……大石悦子
俳句文法 そこが問題、そこがポイント ……井上泰至

連載

俳句史を見直す ……秋尾 敏
ものがたりのある俳句 ……毬矢まりえ
先人のことば ……和田華凜
小説・遥かなるマルキーズ諸島 ……マブソン青眼

俳句と随想12か月 河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

作品評

山本鬼之介

編棒の先が対話の文化の日　神田治江

毛糸の衣類も品揃えが豊富で手頃な価格で買える現今においても、昔ながらの手編みのセーターや、マフラー・帽子・手袋などを、恋人や夫、子や友人などへ贈るために余暇を惜しんで製作に励む女性がいる。いや男性でも女性を凌ぐ技量の人が居ると思う。

忙しくリズムよく交叉する編棒の先端。何の変哲もない家庭内での光景ではあるが、編棒に生命を与えたことで、読者をメルヘンの世界へ誘う俳句になった。「文化の日」という格調のある祭日の季語によって、晩秋の陽光が射し込むリビングで、クラシック音楽を聴きながら、小気味好い手捌きで編棒を繰っている婦人像が見えてくる。

手と眉に秋思あふるるフラメンコ　曲淵徹雄

スペインアンダルシア地方を中心に発展してきた芸能である「フラメンコ」は、その独特の歌と曲・踊・ギター（フラメンコギター・クラシックギター）とカスタネットを中心にした伴奏が特色であるが、特に女性の踊に魅了される。官能的な顔の表情と切れのよい足拍子に合わせた手の撓り。観ていて身体中がぞくぞくしてくる。「情熱と哀愁」「悲哀と歓喜」を歌と踊で表現したフラメンコに、扱い難い季語「秋思」を密着させたことがお手柄と言えよう。

きつちりと干し物畳む菊日和　本橋稀香

取り込んだ洗濯物の畳み方には、人それぞれせの違いがある。手早くはあるがぞんざいであったり、丁寧すぎて作業が遅いなど、手早くきちっと畳むのは簡単なことではなさそうだ。しかし、掲句の人はそれを両立させているように思える。整理ダンスに収納しやすいように角かどをきちっと揃えて畳んでゆく人に好感が持てる。「菊日和」が全てを語っている。

水分神（みくまりのかみ）は川路を神の旅　丸屋詠子

馴染みの薄い神様であるが、辞書によると「流水の分配を司る神」とある。「神の旅」自体が夢のある季語であり、毎年十一月（陰暦十月）に全国の神々が出雲大社に集まるというまるで神様の全国大会を思わせるような楽しさいっぱいの言葉である。山の神は大鷲に乗って、海の神は大亀に乗って、そして、水分神は猪牙舟に乗って川伝いに、それぞれ出雲を

目指すと云うようなことを想像すると、限りなく夢が広がってゆく。神の一人に水分神を登場させ、神の旅の交通手段に川路を結びつけたことで詩情豊かな俳句になった。

掛茶屋に女人の杖や冬紅葉　横山君夫

「掛茶屋」の言葉には江戸時代のイメージがあり、句全体に時代を超越した大らかな雰囲気が介在している。杖は、折り畳んでバッグに収納できるようなお洒落な物と思うが、掛茶屋とのアンバランスな面が持ち味だと思う。秋よりも一段と濃さを増した冬紅葉が、持主の女人を印象づけている。

敬老日訛ほどよきおけさ節　保坂翔太

町内の敬老会での一齣を想像させるような俳句である。一昨年から続いているコロナ感染のことを思えば無理なことではあるが、それを忘れて掲句を読めば愉しげな集まりの場が見えてくる。越後出身の古老が唄い踊る正調「佐渡おけさ」に仲間の拍手が湧く。

凩の電線唸る無人駅　染谷正信

駅員の居ないローカル線である。電気が通じていても、運行されているのは電車ではなく、重油で走る気動車かも知れない。何れにしても虎落笛のように電線が音を発するほどの強い凩が吹き荒んでいるのだから、野中にぽつんとある駅か、山に囲まれた谷間の駅であろう。乗客の居ないホームの上に張られている電線が、ひゅーひゅーと音を立てている様子は何とも淋しい。たった一人この駅に降り立った人物を想像すると、そこから意外な物語が展開するような気がする。

空つ風字（あざ）の消えたる吾が故郷　反町修

市町村の統合によって、「大字」や「字」の文字が地名から外された所が多い。作者の故郷も、昔は大字〇〇字□□と地名が付けられていて、便りを出す際に何時も面倒な思いをしていたが、いつの頃からか町村合併によって市になり、その結果「字」が消えてすっきりした地名になった。しかし、名物の一つである空っ風は大手を振って暴れる故郷である。

女子会や見下ろす街の片時雨　橋本京子

近年女子会と称する元気の良い集まりが各地各所で開かれており、この句の女子会は、市街地から少し離れた高台にあるレストランかホテルの小宴会場で開かれている催しかと推察する。宴もたけなわ団欒の場を離れて窓際に身を移すと、眼下の街の上空には厚い雲が出ており、町並はしっとり雨に濡れているようだ。こちらは薄日が射しているのに……。

女子会の喧噪感と片時雨の静謐感との調和が良い。

茶の花や農家カフェへと誘ふ道　渋谷きいち

昔ながらの教えに加え、自己研鑽によって農作物に付加価値を付け、さらに独自の販売ルートを開拓することによって生産者と消費者の心を一つにする方法が近年増えている。掲句のカフェもその一つかと思うが、自家のハーブ園のハーブを使ったお茶や、有機野菜のサラダなど、こだわり好きの人が悦ぶ農家カフェである。先ず本道から脇道に入る所に洒落た案内板が設けられ、さらに農道に入る場所にカフェの名称と矢印の表示板が立ててある。カフェは、農家の蔵を改装した重厚でモダンな建物で、自然木の特長を生かした椅子とテーブルが客の心を和ませる。導入の「茶の花」が、大事な役目を担っている。

冬の早朝飛翔の鳥に意気高く　西幅公子

遅い冬の太陽が顔を覗かせた時刻、それぞれの巣の鳥たちが元気よく飛び立ってゆく。作者は鳥たちの元気を貰って日課になっているラジオ体操の会場へと向かう。「意気高く」の下五の措辞に、一日の始まりの鳥たちの気持とそれを眺めて同調している作者の気持とが凝縮している。

しぐるるや汽笛遠のくトラス橋　村杉清吉

トラス橋とは、部材同士を三角形に繋ぎ合わせたトラス構造で作られた橋で、安全性・耐久性に優れていると共に形の美しさも兼ね備えている。大阪市の港大橋・東京都の東京ゲートブリッジ・熊本県の天草五橋など、日本国内でトラス橋が多い。掲出句のトラス橋はどのような場所に架かっている橋か。「時雨」と「汽笛遠のく」を結び付けると、鉄道の鉄橋のように思える。しとしとと降る時雨に煙ったトラス橋は、冬の風物として情緒がある。遠ざかってゆく汽笛がアクセントをつくっている。

掃除ロボに猫が飛び乗る文化の日　笹本啓子

室内を巡り巡って自動で掃除する掃除ロボットが発売されてから、幾つかの後発メーカーが参入して競い合っているようだ。充電したバッテリーが減ってくると、ベース基地へ行って充電し、中断した所まで戻って掃除を続けるといったかなりの優れものも出てきた。それだけに価格も結構張るが、整理整頓されて広々とした部屋ほど効果が大きい。家人が留守の時、留守番の猫が掃除ロボットに乗って遊んでいる姿が何とも愛らしい。厳粛な感じの文化の日との取合せが面白い。

小夜更けて落葉の音を聴く欅　鈴木和子

欅の巨木である。周囲が寝静まった夜更け、根元に積もっ

た自らの枝から散った落葉の触れ合う音を聴いている。両者の間に会話があるとすれば、どんな内容になるのか興味が湧いてくる。双方の別れの挨拶か、それとも、欅から落葉への餞の言葉だろうか。風に吹かれて落葉が去ってゆく。

ソリストの愛しき笑顔文化の日　原田秀子

有名なコンサートホールで公演中のソプラノ歌手の笑顔と推察した。やや豊満な身体から発せられる声が素晴らしいが、歌曲の内容に沿って演出される顔の表情もまた然りである。「愛しき笑顔」の言葉が文化の日に相応しい。

足早に暮るる山の端冬桜　越田栄子

秋の釣瓶落しに輪を掛けたように、冬至までは一層日の暮れが早い。少し目を離している内に山裾から日暮がやってくる。その薄暮の中に、薄らと紅を刷いた冬桜が浮んでいる。春の桜と違って存在感は薄いが、確りと自己主張しているように思えてくる。

早暁の凍雲の海夢捨てず　梅澤輝翠

窓から眺める景色は、上空に寒気を伴う厚い雲が広がる冬の海である。辺りはまだ薄暗く、海を見ている人の心は重く塞がれている。現在一つの難題を抱えている身にとって、実に重たい景色である。でも、あの黒雲が去って陽が射したら気分が晴れ、難事の解決策も見付かることだろう。掲出句をこんな風に解釈してみた。

小春日や芝生に並ぶ豆画伯　新暦文

十一月の陽射しが、枯れ色になりかけている芝生に降り注いでいる。小学校低学年の児童達が、公園の芝生に座って写生の真っ最中である。引率の先生が児童の間を巡って質問に答えたり、絵のポイントを指導したりしている。中には、大胆なタッチや色使いで先生を驚かせている子がいたり、逆にうじうじしていて筆が進まぬ子が居たりしてさまざまである。将来この中から名立たる画家が誕生するかも知れない。

梵鐘の里つつむごと雁渡し　檜鼻ことは

季語「雁渡し」は、初秋から仲秋にかけて吹く北風のことで、雁が渡ってくる時季と重なるのでその名が付いたと言われている。

村里の寺で撞く夕刻の梵鐘であろう。鐘の音が里を囲む山々に反響して、一打一打の余韻が長く続いている。中七の措辞がぴったりの長閑な里景色は、作者が現在暮らしているその土地そのものであろうと思う。

水琴窟

（水明集十二月号鑑賞）

池田雅夫

星流れ直ぐに呟く願ひ事　山﨑郁子

流れ星を観測する機会が多い。先日も「火球」という現象がテレビで放映されていた。火球は数秒光り続けるが流れ星は一瞬にして消えてしまう。流れ星が消える前に願い事を唱えると叶うと言われているが、唱えられないのが常である。

渡り鳥見上ぐ国境検問所　向井章子

「国境検問所」の言葉に、コロナ禍の対策措置を思い浮かべる。秋になると北方の国から飛んで来る冬鳥。また、春に南方から来た夏鳥は暖かい国へ帰ってゆく。自由な鳥が羨ましい。「見上ぐ」を「仰ぐ」とすると以下につながる。

虫の夜や音消して去る救急車　山岸弘子

けたたましく走り回る救急車。一刻を争う緊急事態は人ごとではいられない。任務を完了し、ほっと病院を去る救急車。気がつけば虫の声。使命感、安堵感と同時に隊員のやさしさが表現されている。穏やかな日を望まずにはいられない。

水引草やさしく触るる東慶寺　森下美智枝

鎌倉にある「東慶寺」は縁切り寺、かけこみ寺として有名である。細いしなやかな軸にほつほつと小花をつける「水引草」。「水引草」を下五にすると文意がはっきりする。

いとまなく花の落ちたる木槿垣　鈴木藻好

「木槿」の木はあまり大きくならず、観賞用として生垣などに植えられる。一日で咲き切ってしまう花で、そちこちに花を落としているのだろう。「いとまなく」からは生垣の長さを推し測ることができる。由緒あるお家敷にちがいない。

木槿散る茜の空に黒き富士　湯浅　和

『木槿一日の栄』というそうだ。朝咲いた花が夕方には凋んでしまう。昼の華やかさが一転して、夕方には散ってしまった。茜の空はその余韻であろうか。対照的に「黒き富士」が厳かに現われた。色の対比が絶妙に交錯し情景を映し出す。

朝の庭秋の足音すぐそこに　石浜悦子

倒置法というのであろうか。文意を強めたり、リズムを整えたりする倒置法。「すぐそこに秋の足音秋の庭」では平凡すぎると思われ、一工夫されたのだろう。語順を変えることや類義語をさがすなどのことが俳句の力となってゆく。

冬帝のマラソン人の頬たたく　関根千恵

「マラソン」は気温の低い冬期に行われる大会が多い。記録的に期待できるのであろう。充分なウォーミングアップをした上でスタートするのだが、それでも身を切るような寒は避けられない。「冬帝先づ」として滑らかな流れにしたい。

手を止むる剪定鋏百舌鳥の贄　北出久美子

庭木の手入れであろうか。延び放題であった樹木の形を整えて不要の枝をためらわず剪ってゆく。枝先に何やらひっかかっている。しげしげ見るとトカゲのようなものが干乾びている。そうか、これが「百舌鳥の贄」かと一人合点している。

天高し流るる雲へ指てつぽう　安藤みえこ

ユーモアのある句に思わず頷いてしまった。秋特有の巻雲巻積雲は高い空にあってあまり動かない。流れゆく浮雲の多くは積雲、高積雲で、綿雲、羊雲と呼ばれる。小動物か魚の形をした雲であったのだろう。思わずバーンと指でっぽう…。

蚯蚓鳴く畷に煙る銀の糸雨　持永喜夫

「畷」は、田の中のあぜ道、あるいはまっすぐに長く続く道のこと。「蚯蚓鳴く」は、実際には蚯蚓は鳴かない。「畷に煙る銀の糸雨」の視覚的発想、表現に感服した。

暗涙にぼやけて見えぬ碇星　樋口元美

「碇星（いかりぼし）」はカシオペア座のこと。北極星の近くにあり、「W」の形で知られている。「暗涙」は、人知れず流す涙のこと。悠えきれない何かで涙を流している。その切実さが痛々しく伝わってくる。身心を部屋で暖めよう。

雨あがり一斉に泣く蝉の声　福田育子

長谷川秋子の句に「一刻の山雨なれども蜩熄む」がある。状況は正反対であるが共通するものがある。蜩の揃う声に不思議な郷愁を覚える。雨あがりの夕日に照らされた森が眩しく映る。「蝉の声」を「秋の蝉」としてはいかがか。

バイエルの暢気な音色小鳥来る　遠藤人美

「バイエル」は、幼い生徒のためのピアノ演奏の予備教本である。習い始めて間もないのだろう。たどたどしい音色を「暢気な」と表現している。合唱するかのように小鳥も安心して囀っている。「小鳥来る」の取り合わせが妙。

胸張つてテープ切る孫爽やかに　竹内万美

オリンピックではなく、孫の運動会のようである。「運動会」と言わずに「爽やかに」の季語を配したところに、空のようす、風、そして歓声までが鮮やかに描きだされている。

網野月を　選

山紫集

嘘混じる少女の話山茶花散る　内田恵子

山茶花や絵具の赤が見つからない　青木鶴城

良く効きし祖母のまじなひ姫椿　森　和子

山茶花や黒髪なびくかけつくら　保坂翔太

山茶花の見える奥の間開け放つ　岡田宣子

山茶花の白き朝や息を吸ふ　曲淵徹雄

山茶花や道ならぬ恋の散るごとく　山中いちい

山茶花の小径からこりゐざり機　大塚茂子

山茶花や昔の文を捨てられず　下川光子

山茶花や子の縁談の整ひぬ　加藤でん治

――以上特選

山茶花の径は茶室へ続く径　斎藤みよ

頂に元和の板碑茶梅かな　榊原聰子

山茶花の散り重なりて土温し　佐々木典子

山茶花垣ふらと立ち寄る友の家　笹本啓子

山茶花や白寿の説法幕が下り　佐藤克之

さざん花を愛でて朝餉の慎ましく　渋谷きいち

山茶花の散るを待ち受く蕾あり　菅原卓郎
山茶花の花数程に歳を積む　武田重子

山茶花や古民家カフェは賑はひぬ　菅原真理
床の間に山茶花挿して客間とし　田中章嘉

窓明かり山茶花染めしほむらかな　杉浦理恵
山茶花散る集団登校児の後ろ　寺内洋子

山里の庭をやさしく白の山茶花　鈴木和子
山茶花や生垣に添ふ下駄の跡　鳥羽和風

月食や山茶花越しの天体ショー　鈴木藻好
山茶花やためらひながら足元へ　外村紀子

山茶花の枝折戸古びし閑居かな　諏訪サヨ子
咲き誇る山茶花の花末は土　仲田利子

山茶花の門を下りて谷戸の家　関谷多美子
住みし人の年輪きざむ山茶花に　南條きわゑ

山茶花や逃げよか箱根へ小田急で　瀬戸雄二郎
白山茶花一輪飾る忌の膳に　西浦千枝子

山茶花や両手に受くる金平糖　染谷正信
山茶花やおかつぱ跳ぬるけんけんぱ　西幅公子

咲き替はる山茶花やすべすべの肌　反町　修
山茶花や小さき公園弾む声　野口和子

山茶花散る堅き約束有耶無耶に　高島寛治
山茶花や伸び代少し残りをり　野田静香

爆笑の青空法話ひめつばき　髙橋満耶子
母愛でし白山茶花や郷の家　野平美紗子

山茶花や酒の肴の恋の唄　野村美子

山茶花の紅散るところ城の跡　橋本京子

山茶花のひと片風と共に墜つ　原田秀子

山茶花やサスペンダーの袴の子　樋口元美

山茶花の零れし庭の夕明り　日髙道を

山茶花や帰りの遅き子を案じ　福田千春

咲き継ぎて白山茶花や路傍神　藤澤喜久

山茶花の桃色辛し白底翳　正木萬蝶

山茶花散る袋小路に赤鳥居　町野広子

山茶花や咲き止まずまた散り止まず　松井由紀子

山茶花咲く無人駅舎のおもてなし　丸山マスミ

山茶花の家に集合通学児　宮崎紫水

山茶花のはなびら運ぶ青い鳥　宮崎チアキ

山茶花や秘めたる想ひ切り出せず　村杉清吉

寂聴逝く山茶花満つる明るき死　本橋稀香

白尽くす山茶花多（さは）に城下町　森川義子

山茶花を掃きて今年を振り返る　森下美智枝

お屋敷の山茶花秘むる内輪事　森本早苗

奥の院山茶花の垣いづこまで　山岸弘子

山茶花の嫁に来たとき咲き初むる　山田美佐尾

とめどなく散る山茶花や花布団　湯浅　和

杖をつく母山茶花へ歩み寄る　横山君夫

山茶花のしろあかしろと降り敷けり　横山礼子

山茶花の露地に散花の止めどなし　新　暦文

山茶花や紅一点の町工場　阿部幸代

寺の門落ちて山茶花浄土行く　新井孝麿

山茶花や郷愁つのる童歌　荒井倶子

生垣の山茶花に添ひ乳母車　飯田忠男

山茶花の道ゆく人の影染まり　池田雅夫

山茶花咲く娘待ち続ける母に　石川理恵

淡き日に紅山茶花のやすらぐも　井関礼子

ラインで来る恩師の訃報さざん花咲く　石田慶子

山茶花や老犬構へ長屋門　井上燈女

陽を誘ひ白山茶花の蕊笑まふ　井上玲子

山茶花や貧しき庭に火を点す　井口俊晴

山茶花や盛衰しのぶ空屋敷　上戸千津子

山茶花や仏間に二輪咲き始む　宇田白鷺

山茶花に終の住処と告げにけり　梅澤輝翠

山茶花散りぬ吐息の度にまた散りぬ　梅澤佐江

切切たる法話山茶花散る庵　大場順子

山茶花の花びら一枚我の息　岡野順子

山茶花や散華のごとく境内に　川崎道子

美しや境界線の白山茶花　川島典虎

山茶花や茶の刻家人が茶菓持ち来　河原叔子

机下にある山茶花時に友となる　川村　治

姫椿耐へし過去ある影写す　神田治江

重なりて山茶花散るや石畳　木村るみ子

白山茶花袱紗捌きの指細く　熊倉千重子

朝は白帰路に紅みす山茶花か　河野はるみ

山茶花や花びらたどり母の家　小駒さち子

山茶花や月の満ち欠け見てをりぬ　越田栄子

山茶花散るダックスフントの散歩道　後藤綾子

山茶花や源平きそふ裏通り　近藤徹平

山紫集作品評　網野月を

兼題の「山茶花」に対して今回の投句は、個人的な想い出や感傷が凝縮されている内容のものが多かったようです。一方で客観性の優位な作句は比較的に少数派であったように見受けられました。

嘘混じる少女の話山茶花散る　内田恵子

座五の季語「山茶花」もしくは「山茶花散る」は上五中七の句意とどのような関係性を有しているのでしょうか。常識的に鑑賞すれば少女の嘘は山茶花の散るに似ていると捉えるべきでしょう。作者は嘘と分かっているのですから、その嘘が少しずつ露呈して行く様が、山茶花の散り振りに似通っているということです。ただ大人の目から見ると、その嘘は既に分かり切ったことであり、想定内の嘘であるのです。花弁の可憐さが想定内という大人の余裕を担保しているようにも読めます。ただ、より深読みする事が許されるならば、嘘の暴かれる過程で、山茶花の散る如く、少女は大人への一歩を踏み出したということも句の延長線上に垣間見えるように思います。季語「山茶花」の新しい本意を探ろうとした意欲的な作品であろうと考えます。

山茶花や絵具の赤が見つからない　青木鶴城

中七座五の口語表現は通常の作者の叙法とは異なるものです。日本画にしろ水彩画にしろ赤が無いのは通常はめったにないし、赤い山茶花を描くなら十分に用意してから描くものなのでしょうが、見つからないのです。折角、描こうとした心を折ってしまったということでしょう。ただ、赤絵具の見つからないことに描き手の安堵感も感じるのです。それほどに「山茶花」が美しくて、描き写すことへの戸惑いも感じます。上五の「……や」切れがその戸惑いを演出しています。

良く効きし祖母のまじなひ姫椿　森　和子

上五の「……し」があるから回想の句意になっているようです。はて何の「まじなひ」でしょう。座五の季語「姫椿」の傍題が活きています。

山茶花や黒髪なびくかけつくら　保坂翔太

景の取り合わせの句である。上五の季語「山茶花」の咲き誇

る景と、その視界の延長線上にある黒髪の少女たちの駆けっ競の取り合わせが詩興を醸し出しています。取り合わせ、つまり配合の素材二つの選択は俳句の醍醐味ですね。

山茶花の見える奥の間開け放つ　　岡田宣子

一句仕立ての句作りです。句意はそのままであって、ストレートに腑に落ちます。そこに斟酌はありません。この季節に座五の「開け放つ」は些か大胆ですが、たぶん小春日の暖かさを覚える陽気であったのでしょう。「開け放つ」が句の勢いを助長しています。

山茶花の白き朝や息を吸ふ　　曲淵徹雄

なかなかに複雑な表現なのですが、句意は難解さを回避しています。句は即座に理解できることを提要の一つとしますから。座五の「息を吸ふ」がすべてを集約しています、表現すべき事柄を包含しています。「息を吐く」なら、楽になった意味になるのでしょうが、「息を吸ふ」にしたことで、新たな希望というか、前進するポジティヴな句意に仕上がっています。その事が朝のイメージに繋がっているようです。

山茶花や道ならぬ恋の散るごとく　　山中いちい

山茶花の散るごとくに道ならぬ恋が散ったのではないのです。つまり逆説的な表現なのです。しかしながらこの表現の方が自然でありましょうね。失恋の経験を経てから、山茶花の散る様を見てはじめて自分の経験が散る山茶花の様にも当てはまることを認めたのでしょう。

山茶花の小径からこりゐざり機　　大塚茂子

中七の「こり」の平仮名表記に戸惑ってしまいました。筆者は狐狸であろうと勝手に解釈しました。狐はなかなか人里には現れないようですが、狸は人街に近いところにも出没するようです。座五の「ゐざり機」ですから、作者が使用しているのかも知れないし、その空間にそっと置かれているのかも知れません。

山茶花や昔の文を捨てられず　　下川光子

先ずは、中七の「昔の文」への問いかけが句を読み解く鍵になります。友人からのそれであろうか。近親者からの手紙なのか、特に母親か父親からの手紙なのかも知れませんし、少々艶っぽく詮索すれば心を寄せた人からの文かも知れません。句の情報からはそれ以上、判然としませんね。ただ十分に大切な方からの文であることは伝わってきます。そしてこの世には残してはならない文であることも作者は理解しています。手元に置き続けたい気持ちと他には見せられない気持ちの葛藤が上五の「山茶花や」に込められています。

山茶花や子の縁談の整ひぬ　　加藤でん治

上五の季語「山茶花」のいわゆる本意・本情に拠って中七座五の句意を担保しています。俳句でいう本意・本情とは、季語の底辺に在るイメージの総体を言うのでしょう。長い歴史を経て積み重ねられた季語に収斂されるディスクール（言説）の世界観そのものを言うのです。季語「山茶花」の本意・本情に包まれた世界の中に中七座五の句意がすっぽりと包み込まれています。

大村節代 選

鼓笛集

筋ひとつ違へて酉の市の綺羅
淀みなき香具師の口上酉の市
屋号毎に競ふ意匠や熊手市

本橋稀香

遠ざかる旅の車や秋深む
確と魚羽撃く鷹の傾ぐなり
空の青池塘に映し枯れる尾瀬

西幅公子

虎落笛漁船見守る常夜燈
冬の暮火の粉散り散り刀鍛冶
かいつむり浮き出る親を追ひにけり

村杉清吉

陰陽師祀る御社虎落笛
薄氷や光を弾く鯉ゆらり
一葉の面影の坂冬桜

外村紀子

年送るビルの谷間でハグをして
香り立つ石臼で挽く晦日蕎麦
初参り氷川の杜のりんご飴

梅澤輝翠

錦秋の筑波を参る共白髪
西壁の跡や風水古暦
年の夜寂聴の無き天台寺

新　暦文

福来蜜柑の陳皮干したる荒筵
セラピーの犬と和みし散歩道
点々と紅く華やぐからす瓜

諏訪サヨ子

手作りや砂糖多めのレモンジャム
初霜や朝日に光る屋根瓦
板前の腕の見せ場や河豚の皿

武田重子

賑やかに来ては去りゆく寒雀
寒雀ひとりで祝ふ誕生日
寒雀一羽外れてゐたりけり

寺内洋子

じいちやんのパワー見てくれ大根投げ
鮟鱇鍋サタンの胆が見え隠れ
歌留多取り乙女変じて鬼となる

佐藤克之

名刹や槌音響く年用意
里人の自慢や大鷹住める森
慈悲深き白衣観音丘の冬

鈴木和子

鴨たちが川面に写る空泳ぐ
大木の天辺にある鷹の影
山茶花や鳥とびこみて花散らす

湯浅　和

外科内科投薬嵩む歳用意
考へて注連は今年も輪飾に
老老の仕来り省く歳用意

水落守伊

☆

やはらかき風の流るる小春かな
新宿の雑踏一人クリスマス
くさめする隣人今日も元気かな

千坂平通

寒林の燃ゆる如くの落暉かな
客用の和菓子買ひけり冬の街
和やかに話す父母炬燵の間

高原和子

槽の中冬眠するや亀親子
寒雀マスクの奥の微笑かな
昔話友と語らふ十二月

南條きわゑ

パンジーにあやかる短気損気かな
口笛や見上ぐ大地のこの月夜
冬椿落つも自若の厚化粧

安倍弘夫

☆

鼓笛集作品評

大村節代

淀みなき香具師の口上酉の市　本橋稀香

浅草の鷲神社が発祥と言われる酉の市。今では各地の神社で年末の風物詩となっている。作者は浦和在住なので、掲句は、浦和の調神社の十二日まちを詠まれたのかと思われる。ずらりと並んだ熊手屋さん。呼び込みの香具師との掛合いを楽しみに値切る。値切った後で支払う時に、代金と値切った金子を「ご祝儀だよ」と渡すのが「粋」というもの。そして、開運招福、商売繁盛と威勢のよい掛声で手締となる。来年もコロナに負けず、平穏無事であります様にと。

空の青池塘に映し枯れる尾瀬　西幅公子

池塘とは、広辞苑によると、高山や寒冷地の湿地の池とある。中七の池塘の表現により、尾瀬の湿地に長々続く木道の景が浮ぶ。春夏秋とハイカーで賑わった尾瀬も、草木が枯れ果て、静寂が増す。青空が誰も居ない池に浮き、無人の尾瀬はひっそりと静まる。

虎落笛漁船見守る常夜燈　村杉清吉

灯台は、漁船はじめ、船が安全に航行出来るよう、常夜燈を灯す。一晩中、船の安全を見守る灯台も近頃は、無人の所も多いと聞くが、それでもメンテナンス等が伴い、大変な仕事であろう。虎落笛の季語によりその大変さが伝わる。

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解）　北山建治郎

反戦のビラを片手に卒業す

二〇一二年八月号「文芸春秋」、同級生交歓欄に書いた文章の、巻頭に載せた句です。学生運動で荒れた卒業式、卒業して行く不安や連帯を詠んだ。一生想い出に残る句です。

水明例会

第一例会（浦和）

遠山をきりりと透かせ冬木立　境　延昭
冬木立何処ともなくオラトリオ　茂木和子
月光に瘤さらけ出し冬木立　報
千両や張子の虎を置く書院　由紀子
沈む日のたまゆらの朱よ冬木立　節代
父かとも思ふ冬木に凭れゐる　はるみ
夕日受け兵馬俑めく冬木立　治子
　　マスミ
柔道着の白き少年冬木立　順子
キネマのはしご師走心を遠く置き　稀香
張る枝の鋼の如き冬木立　——以上特選
弔問の塩置く框雪催　治子
空中に斬り合ふ葉影冬木立　順子
てつぺんに鴉動ぜず冬木立　チアキ
地底にマグマ滾らす山の冬木立　稀香
置き去りの目覚ましぽつん冬日向　光弥
三叉路に迷ひて佇てり冬木立　和葉
冬木立埴輪陳列郷土館　延昭
すくと立ち生垣配す冬木立　理恵
実千両旅する鳥の置土産　喜恵
掛軸を置き換ふ一日年惜しむ　徹平
棟梁は眼鏡を置きて根深汁　はるみ
黒ぐろと鳥飛び立たす冬木立　由紀子
　　マスミ
　　節代
　　和子

第二例会（東京本所）

天狼の闇の失せたる街に住む　山中みどり
天狼や滅びしものの眼の怒り　太田絹映
天狼や「かもしれない」を口癖に　報
別れ日や天狼光失はず　峰雄
都鳥人混みに聞く国訛　〃
山は溶け空に天狼煌々と　竺仙
引き際を決められぬまま年移る　鶴城
シリウスに帰らぬ猫を探しをり　〃
故郷を去りし日はるか天狼星　玲子
シリウスやむかし別れた男の眼　みどり
天狼や拱いてゐる悪企み　〃
天狼や野望に燃える純な奴　絹映
　　——以上特選
引力と闘ふ星あり冬銀河　峰雄
豆引くや空どこまでも青きこと　いちい
炬燵して膝の記憶に子の重さ　竺仙
「もう一軒」袖を引く奴忘年会　鶴城
妻の留守ひとりちやんこが定番に　敏江
産土の永久に恵まる天狼星　玲子
名を知れば情冴ゆるや星や星　士史
引け際の愛嬌暮の寄席囃子　みどり
天狼や夢は叶へる為に有り　絹映

第三例会（東京）

おほつぴらに軋む江ノ電冬めける　五明昇　曲淵徹雄　報　徹雄

ままならぬものこそいのち木の葉髪　綾子
読み返す母への手紙冬日濃し　雅夫
往年の艶を残して日向ぼこ　萬蝶
中庭に香る花枇杷尼僧院　〃
「序の舞」の気品の褪せず古暦　大場順子
壁画の如く壁に馴染みし古暦　康世
持越しの大願重き古暦　昇

——以上特選

古暦日頃雑事に追はれきし　岡野順子
つまづいて笑ふも独り冬うらら　徹雄
古暦酸いも甘いもとぢ込めて　綾子
コロナ禍の日々見つめ来し古暦　大場順子
古暦ほらね良き日もあつたでしよう　理恵
同胞の慶事で仕舞ふ古暦　萬蝶
残照の川瀬にぽつり冬の鳥　雅夫
居酒屋の切り貼り多き古暦　康世
クリムトの名画を惜しむ古暦　喜久
短日や動く歩道を急ぎ足　昇

第四例会（浦和）

境　延昭
石井喜恵　報

霜柱踏めば体内時計打つ　でん治
板長が絵皿に咲かす河豚の花　昇
踏むたびに子供に返る霜柱　順子
萩平鉢窯変浮かせ河豚ならぶ　光弥
水槽のふぐ悠々と出番待つ　修
霜柱神の庭掃く緋の袴　マスミ
河豚食うて尽くることなき女帝論　延昭
霜柱踏んで弾んで登校児　喜恵

——以上特選

蓋をせし庭の筒井や霜柱　延昭
なむあみだ俎板のふぐ膨れけり　修
破れ垣の今朝は清しや霜柱　由紀子
光放つ大地の息吹霜柱　マスミ
河豚刺しを三口で食ふ力士かな　暦文
ほろ酔ひの父の饒舌河豚鍋　玲子
霜柱ドミノ倒しのやうに踏む　翔太
平らかな国分寺跡霜柱　光子
通学子の犇めく声や霜柱　でん治
霜柱修道院の高き塀　恵子
河豚食うて雄心出づる馬関の夜　昇
ふくよかに福を呼びをり河豚提灯　順子
パレードの美しき整列霜柱　寛治
毒舌も今日は控へ目河豚つつく　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ　報

冬の暮旅の終りの滑走路　水尾
お悔みの文のうす墨冬の暮　〃
街の灯の連鎖で点る冬の暮　はるみ
火事とほく影絵のやうな美しさ　美佐尾
火事近く我が不意打ちの不整脈　義子
幻日を消し薄墨色の冬の暮　佐江
火事鎮火星いつせいに瞬けり　〃

——以上特選

恐いもの見たさに走る火事現場　美佐尾
騒めきに夜中の近火怖れけり　義子
茅葺きの山門ゆかし冬暮光　玲子
火事跡の黒き柱や空白し　はるみ
朴訥の木々の向かうに山の火事　水尾
火事跡の商店街や絆生む　宣子
すは火事や江戸つ子ならずも血が騒ぐ　理恵
独り居に明かりを灯す寒暮かな　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子　報

会葬の礼もほどほど寒時雨　鶴城
枯芙蓉無声映画のかかる小屋　慶子
娘との散歩いつまで枯芙蓉　理恵
冬の星会ふ日の為のハートブローチ　倭子
夕暮の静謐纏ふ枯芙蓉　佐江
華やかな日の追憶や枯芙蓉　紀子
咲き切つて身は風まかせ枯芙蓉　マスミ
大鵬と出会ふ大呂の昭和展　月を
手をかざす一期一会の楣(まぐさ)明かり　ひろこ

——以上特選

水割の描く「サヨウナラ」芙蓉枯る　慶子
折れ易きこの一本気や枯芙蓉　倭子

晴晴とすつからかんの枯芙蓉　理恵
雨を吸ふ鉢の玉土枯芙蓉　月を
枯芙蓉弾けてのちの華やぎに　佐江
密会をそしらぬ振りの聖夜かな　はるみ
もう一声と外野の囃す熊手市　マスミ
鬼平の寂声恋し枯芙蓉　千春
教はることの多き晩節日記買ふ　鶴城
菰を巻く香りもまとひ松並木　紀子
風雪を刻む顔枯芙蓉　俊晴
眠りより覚めよ日向の枯芙蓉　ひろこ
誉められた池を偲びて枯芙蓉　儀勝
結界の山茶花は濃し鳥が騒ぐ　萬蝶

昔話あれこれ12

皇后石之日売命の嫉妬

ある時皇后は、新嘗祭の酒宴に使う御綱柏を採りにはるばる紀伊国まで出掛けた。この柏を採るのは皇后の神聖な役目であった。皇后が御綱柏を船に満載して帰ろうとしていた時、皇后の留守中、天皇は八田若郎女（応神天皇皇女・仁徳天皇異母妹）を宮殿に入れ、寵愛しているという話を耳にする。怒り狂った皇后は御綱柏を全て海に投げ捨てて、宮殿に戻らず淀川から木津川に入り遡って、山代（山城）の百済の人奴理能美の家に留まった。

皇后への和解の使者

これを聞いた天皇は、慌てて使者を派遣して愛の歌を届けさせた。が皇后は頑なに拒絶の態度を貫く。そこで奴理能美らが一計を案じ、「お后さまがここにおいでになったのは、幼虫が繭になり、そして蛾になるという三種に代わる不思議な虫（蚕）をご覧になるためだけでございます。」と申し上げると、天皇はその珍しい虫を見るという口実で奴理能美の家を訪れた。天皇直々のお出ましで皇后はやっと機嫌を直し宮殿に帰った。

八田皇女との別れ

こうなると、天皇は八田皇女と別れねばならない。恋しい思いを歌に託して皇女に送った。

天皇の詠んだ歌は

八田の　一本菅は　子持たず
立ちか荒れなむ
あたら菅原
言をこそ　菅原と言はめ
あたら清し女

（八田の野に立つ一本の菅は子を持たずに枯れてしまうのか。菅とは言うが、貴女のことなんだ。清々しい美女を一人おくなんて惜しいことよ）

八田皇女の返歌は

八田の　一本菅は　一人居りとも
大君し　良しと聞こさば
一人居りとも

（八田の野に立つ一本の菅
私は一人でいても少しもかまいません。大君さえそれでいいとおっしゃるなら、私は一人でおりますわ）

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

神戸大池句会（神戸）

行く年の踊り納めのワルツかな　早苗
木枯や裏六甲に住み旧るも　礼子
葉がくれにひつそり覗く枇杷の花　千津子
木枯やポール越えゆく楕円球　玲子

俳句の手ほどき（岩槻）

数へ日や委細明かせぬ交際費　延昭
瀬戸際で和解成立返り花　倭子
熱燗や際疾い話そこらまで　ます美
括られて兵馬俑めく白菜畑　佐江
白菜や畑に座禅の達磨めく　徹平
海光に干す白菜を真二つ　水尾
歯触りのよき白菜の一夜漬　義子
大白菜ふたりがかりで抱ふる児　翔太
白菜を真二つにする試し斬り　忠男
白菜や巻きて白色保ちをり　卓郎
天日干し白菜漬の塩加減　美子
玄関に白菜の山若女房　幸代
この際もあの際もなく年暮るる　桂子
冬ばらの際立つ庭に足を止む　久美子
山際をさ迷うてをり狩の犬　かつ子

櫟の会（浦和）

客受けの違ふ売れ筋年の市　裕誌
大門（おおもん）の門限破り雪女郎　克之
すれ違ふ喪服の人や雪女　富子
雪女冷たくされて燃え上がり　文子
人混みの流れにまかせ年の市　富美子
夜のドライブ前を横切る雪女郎　千重子
年の市寄り添ひ歩む盲導犬　敦子
旅先でこけし買ひけり年の市　妙子
断ち切れぬ里への想ひ雪女　朋子
参道の雑多な匂ひ年の市　治子

めだか句会（浦和）

水鳥や朱色に染まるビルと空　敦子
水鳥を数へあぐねて塩にぎり　育子
ふくらみに何を隠して水鳥は　はるみ
浮き島や群れる水鳥重たかろ　英美
水鳥や曳き波を受け群れ揺らぐ　謙一
患者待つ白き山茶花背の高さ　智子
水鳥の翡翠は水面揺らしをり　真由美
陽を浴びし水鳥眺め歩をゆるめ　八千代
散り敷けるままをしばらく姫椿　月を
山茶花や箪笥を担ぐ奴がゐて　鶴城

青葉の会（浦和）

利も損もご破算となる年の夜　政代
兄逝きし悲しみ抱へ年は行く　美紗子
お利口にと吾子に絵本をクリスマス　真理
年逝くや友の墓石にやつと触れ　美智枝
冬座敷利久好みの水指よ　美子
読み切れぬかな女全集年流る　啓子
行く年の柴又訪へば寅・さくら　公子
利き酒に五感ふるはす年の暮　和子
行く年にスマホに残す置きみやげ　洋子
枯野には魔物が御座す夕まぐれ　輝翠

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

玉子酒象の親子のマグカップ　延昭
襟巻を真知子巻する朝市女　美枝子
おとうとが「ぼくも」とせがむ玉子酒　千恵子
高速の闇へ飛び去る時雨かな　俊晴
湾曲の脚を隠して冬コート　淑子
時雨るるや浅草六区の絵看板　正信
真夜中の時雨に滲む保線の灯　早都子
美少女と紛ふ少年赤マフラー　倶子
大振りを小さく啜る玉子酒　昇

水明澪つくし句会（大阪）

コロナ禍や韓流ドラマに嵌る冬　洋子
かげに影重なる葉影冬灯　智恵子
寒風に何の何のと胸を張り　人美
海面の気嵐立つや黄金色　美令
年惜しむ富士の高嶺を仰ぎつつ　富士桜
絵ガラスに染まる聖堂レノンの忌　ゆら女

水明鬼石句会（鬼石）

被り癖そのまま亡母の冬帽子　和子
猫だいて一人暮らしの霜夜かな　ナヲ子
日向ぼこしてどの顔も羅漢様　紀子
紅葉街道赤黄緑のつづら折り　洋子

珊瑚の会（浦和）

数へ日の人気ラーメン店に列　広子
木菟や眠れぬ夜は歌うたふ　和葉
数へ日の買ひ物袋大袋　かつ子
木菟や杜の奥より巫女の鈴　喜恵
数へ日や出来ぬことより出来ること　マスミ
御料林深き闇からづくの声　水尾
数へ日や忙しく回る理髪灯　昇
木菟や芳一の弾く壇の浦　恵子
数へ日や雁字搦めの身の不自由　光子
活入れる棟梁の声数へ日の　史代
木菟の夜通し見張る神の杜　和子
数へ日や続き気になるミステリー　節代

花衣の会（浦和）

冬夕焼見むと窓辺に佇つ慣ひ　みよ
一輪の水仙の香に誰そ想ふ　みち
朝明出づ犬に引かれて息白し　峯雄
隊員の息の白さは一メートル　治
畦に群れ福良雀の団子なる　章嘉

たかんな俳句会（川口）

夕映えの波にたゆたふ都鳥　久美子
夕焼と空をわけあふ冬の月　福美
寄鍋や湯気のむかうへ去る懸念　小麦
しなやかに大川を舞ふ都鳥　勢津子
寄鍋を囲める程の仲となり　和子
大川の水脈を引き寄せ都鳥　義子
夜語りは酒と寄鍋旧き友　鶴城
言問や澪に浮寝の都鳥　水尾
出来不出来のけしゴム判子暮早し　静香

りんどう俳句会（浦和）

白鳥の水脈煌めかす朝日かな　紀子
学ぶ子に窓閉む母の葛湯かな　弘夫
白鳥や湖心に舞へるバレリーナ　治子
とろうりと芯に染み入る葛湯かな　サヨ子
白鳥や白衣の女医の薄化粧　翔太
耳に付く我が子の諌め葛湯浴く　卓郎
白鳥の留鳥となり沼に住む　利子
大白鳥群れて湖面の傾ぎけり　寛治
へら重くなりて葛湯の透き来たる　君夫
大白鳥哀しき白を纏ひけり　徹雄
白鳥の眠れば毬のごときかな　典子
手付かずの空の青より大白鳥　正信
碧水を引いて飛び立つ大白鳥　順子

芙蓉句会（浦和）

北風やコロナ変異に閉口す　正子
居酒屋の閉ぢる噂や冬の雨　道子
湯豆腐や子の珍しく饒舌に　税子
湯豆腐や薬味は柚子と風の音　仁
パソコンを閉ぢて窓には冬の月　ともこ
再びの国境閉鎖冬ざるる　美子

円卓の会（浦和）

仕付け糸といて晴れ着を年用意　輝翠
蕎麦を打つやもめ男や年の暮　道を
何とまあ雑なところに札納　修
ゆつくりと流るる落葉五十鈴川　翔太
来ぬ人の足音を待つ一冬樹　静香
冬麗や朝の挨拶のやうなもの　月を
十年を如何に残さむ日記買ふ　鶴城

水明松本句会（松本）

快晴や鳥の群がる子守柿　陽子
両頬にほほばる蜜入る林檎かな　マリス
朝日浴び白樺落葉輝き舞ふ　玲子
胸中のわづかなゆらぎ凩吹く　寿子

皐月の会（浦和）

船上のワイン紳士淑女のクリスマス　美佐尾
喧噪の隙間を縫うて来る聖夜　珪子
クリスマスそろりとケーキ抱き帰る　順子
冬枯や谺を返す空は青　紀子
うす目開けパパがサンタと知りて待つ　静香
焚火の音聞きて独りの世界かな　孝麿
白鳥や暮色の影にこぼれ入る　暦文
粕汁や能登はやさしや土までも　きいち

蝌蚪の会（浦和）

鷹を追ふ街の烏や一騎打ち　風舎
着ぶくれの下脹れの児抱き上ぐる　礼子
壊はれさうでも摑みたい初氷　ひさの
静謐の世なれコロナや初氷　キヌエ
ダム底に沈む村あり初氷　朝香
鷹の目やビルの谷間の新狩場　さち子
帆翔の鷹の羽音の静かなり　元美
水底の藻を透かし見る初氷　るみ子
投げ捨ててゴジラのこころ初氷　月を
突然のつれない素振り初氷　鶴城
鷹声に強張る気配森の中　宣子

ミモザの会（横浜）

ちくわぶの無きおでんとは夫を待つ　慶子
冬ぬくし話し上手の副住職　亜弥子
岸壁にへばりつきたる石蕗の花　栄子
冬りんご大小まぢり無人店　由美子
哀しみに慣れし昨今古暦　萬蝶
よく喋る女山茶花の垣根越し　史代
風呂吹きや喜寿の祝ひの若狭箸　千春

若鮎句会（浦和）

何も無き空を突き刺す冬木立　さなえ
冬木立雲に届きし鳥の声　香音子
冬筑波母の日記の文字乱れ　芳春
枝先のより遠くへと冬木立　万美
冬木立常に寂しき書の「木」の字　拓真
冬木立昔のジャージチャック締め　順
取りあへず流離うてみる冬木立　亮一
夕日いまデクレッシェンド冬木立　稀香
数へ日や思ひ出ばかりよみがへる　夕峰
生きるとは立ち止まること冬木立　月を
インク文字滲む手記群開戦日　鶴城
数へ日に明日さへ見えず生きる日々　喜夫

野ばらの会（浦和）

一綛を子より巻き取る毛糸玉　栄子
毛糸編む横の猫の眼良く動く　和子
糶売の箱の虎ふぐ尾びれゆる　茂子
化学式諳じてみる河豚の毒　秀子
毛糸編む農婦まどかな灯の下に　治江
毛糸編む迷うて解く一目から　夏江
河豚刺しの一気一列至福なり　みき子

和歌山水明句会（和歌山）

紙鍋の豆腐ふつふつ雪催　和子
北風や浮足立ちし測量士　道子
冬紅葉傾ぎはじめし陽に映ゆる　千枝子
オンラインの生花体験十二月　千世子
いとほしむ残る一葉冬紅葉　満耶子
冬の霧幻想的に陽の昇る　きわゑ
あの輝きを夫と決めたり寒昴　洋子
合図待つ鯨は鼻を突きあげて　廸代

光が丘俳句教室（和歌山）

年金に見合ふ物など歳の市　守伊
数へ日ののつそり歩く猫二匹　はる
煤逃げの男集まるパチンコ屋　康子
小難しい話さて置き年忘　竜也
陽の差して水鳥の朝始まりぬ　理恵

鶴川山百合句会（町田）

停電に騒ぎだしたる冬の星　雄二郎
枇杷の花冷めたコーヒー飲みながら　月を
凍星のこぼれんばかり城ヶ島　喜久
枇杷の花かたまつて咲くさびしさよ　史代
終の地は海のない町枇杷の花　広子
板張りの廊下のきしみ冬の星　千春
彼のひとの声する方や枇杷咲けり　萬蝶
枇杷咲くやいくたびも文書き直し　理恵
古日記思ひたどれる白紙の日　美千子
冬の陽の馬の睫毛の長きこと　玲子

きざきサークル（浦和）

着ぶくれて我の背に見る老の影　光子
狐塚夜毎に細くなりし月　倶子
裏山に狐鳴く夜の仕舞風呂　啓子
着ぶくれや三回ワクチン思案中　和枝
着ぶくれてもたつく朝の身の重さ　かつ子
にはとりを盗人たけだけしき狐かな　タイ
狐火の屋根から墓へ直滑降　喜代子
着ぶくれて夜間工事の赤い棒　和子

繭の会（浦和）

師走の虹孫を抱きて子守歌　税子
加速する地球の自転師走かな　ひさの
友の顔浮かべそば打つ師走かな　風舎
歳重ぬ思ひ惑はす師走かな　トエ
まづ窓を拭きて清しく師走待つ　粉雪
おやまあといつもの道に冬いちご　比早子
冬苺ワイングラスに映ゆる赤　真理子
派手なシャツ着こなしてゐる師走かな　月を
「早いもので」口を揃へる師走かな　鶴城
母のごとくに居るだけでよし冬苺　京子

芽吹句会（浦和）

赤き手や雑巾掛けの冬の寺　修
ポインセチア真つ赤に燃えてディナーショー　千重子
鋤焼の香の迂回する裏階段　ひろこ
冬セール突如真つ赤なバック買ふ　富子
仏前に先づは一献桜鍋　チアキ
鋤焼や先づは祖母にと鍋奉行　玲子
鋤焼はオヤジの証給料日　道を

水明熊谷句会（熊谷）

準備整ふ干支の置き物年の暮　栄子
陶の牛納戸に戻る年の暮　徹平
只の風邪を願ふをかしさ熱の夜　和子
設ひを替へて楽しぶ年の暮　秀子
風邪七日伸びる早さの爪を切る　燈女
ほとほとと夫がそば打つ年の暮　治江
うなじより衰へゆくや風邪初め　茂子

山茶花（浦和）

つかの間の入り日に染まる浮寝鳥　マスミ
浮寝鳥八十路の我も マイペース　泰子
耳遠し枯蔓のごと孤独なり　光子
二羽で行く波紋重なり浮寝鳥　美江子
枯蔓や保険更新通知あり　清一
浮寝鳥綴れ織りなす波頭　綾子

桜林句会（大宮）

昭和レトロの髪飾り買ふ年の市　光代
湯豆腐や昭和歌謡を口遊む　光子
潮騒のとどく三浦の掛け大根　知子
卒寿かな昭和懐し鮟鱇鍋　美佐尾

水明小川句会（小川）

風なくば不動のままに枯尾花　みや
十二月右肩上がりの障子紙　綾子
手をかざし雪虫追へど雲の中　きよ子
脳トレの神経衰弱冬座敷　栄子

野菊の会（与野）

耳たぶの湿りを銀杏落葉かな　美代子
故郷へ暮れの挨拶返り花　和子
和み居る冬の日差しの鬼瓦　清子
冬紅葉越えて色無き藩主廟　光子

あゆみの会（浦和）

河豚鍋に五臓六腑が騒ぎ出す　朋子
湯ざめして見たきドラマは最終回　圭子
駄駄つ子のふくれつ面やふぐの顔　重子
星空に見とれて親子湯冷めせり　山遊
河豚ちりの湯気の向かうの泣きつ面　和
抱きしめてやりたい君の湯冷め顔　藻好

雛の会（浦和）

石磴百段研ぎゆく風や除夜詣　喜恵
野地蔵の片頬を射る冬夕焼　燈女
荒塩をまとつて白菜しづまりぬ　政代
冬夕焼心の塵の灯りけり　チアキ
冬の月石灯籠の灯の揺るる　輝翠
束の間の逢瀬のやうな冬夕焼　佐江

新樹の会（浦和）

下町の屋根に十字架除夜の月　徹雄
牧師の家は六畳二間日脚伸ぶ　正信
除夜の鐘余韻に浸る明くる朝　平通
年の夜や女系家族に男声　道を
除夜の酒一人ちびちび夢現　修
門松の早く立ちたる医師の家　京子
松飾る三味の音漏るる夕まぐれ　清吉
年の夜の母と娘の厨かな　鶴城

りそな俳句会（浦和）

虎落笛一人寝の夜の胸の内　道を
道の駅イケメン作の蕪買ふ　暦文
忘れえぬ古里訛もがり笛　雅夫
盛り付けで冬を描くよ蕪蒸し　京子
店先の夕日に染まる白蕪　久美子
終電の軋むブレーキ虎落笛　寛治
炊き立てに蕪の糠漬け菜つ葉汁　勲
修道士祈り果てなし虎落笛　建治郎
一夜漬けの程好き加減赤蕪　マスミ

櫻蔭句会（浦和）

日めくりも痩せて新巻届く頃　道子
出刃を研ぐ父新巻を切る母よ　美子
塩鮭の塩たつぷりと銀光る　美智枝
直実の鎌倉古道木の葉散る　公子
瀞行けば天より木の葉降り止まず　多美子
木の葉舞ひ鳥の如くにランディング　千恵
唖と口を開け新巻の吊られけり　茂子
峡の村塩引吊し風を待つ　真理
旅日記色よき木の葉挟みおき　由紀子
海鳴と風と塩鮭夫の郷　幸代

柿の木塾（浦和）

山眠る街道を往く薬売り　恵子
逢ふ術もなき人恋し帰り花　昇
追伸のごとき一花返り花　水尾
日本列島寝釈迦のやうに山眠る　かつ子
人の世に熱湯を噴きあげて山眠る　光弥
節くれし手をつなぎ合ひ帰り花　俊晴
掛小屋に色取り添へし返り花　節代
返り花三年日記大詰めに　和葉
白き花色を違へて返り花　和子

謹弔

森田恒宝様（誌友）は昨年十一月十五日石塚しず子様（誌友）は一月一日に逝去されました。謹んで哀悼申し上げます。

お侘び

一月号七九頁に掲載の「通信指導のご案内」は、以前のご案内でした。

境延昭氏、網野月を氏に多大なご迷惑をおかけしました。深く陳謝致します。尚本号二八頁に正しい「通信指導のご案内」を載せましたので、ご利用下さい。（編集部）

令和４年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句(表題を付す) 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	**令和４年２月末日（発行所必着）**
応募方法	**水明 12 月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（９名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　井口俊晴
保坂翔太　青木鶴城　日髙道を

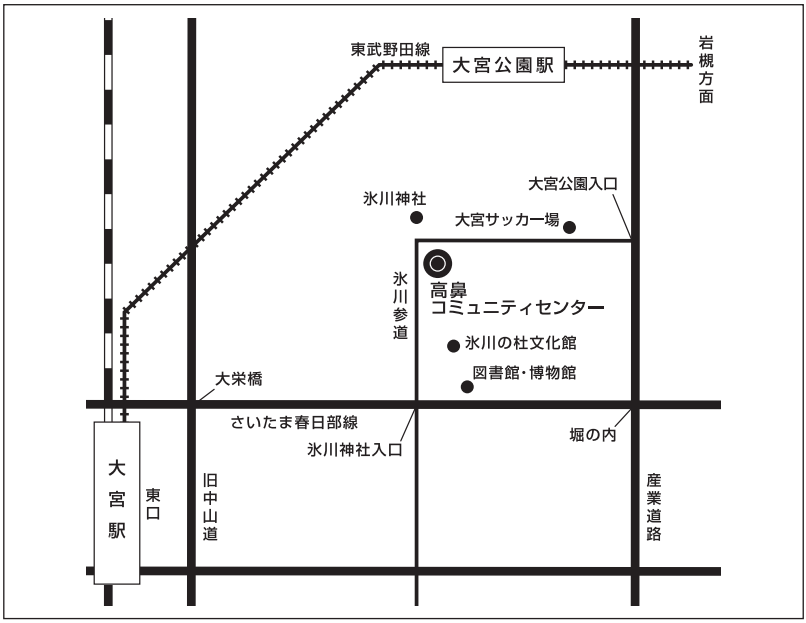
新珠賞推選委員（５名）

宇田白鷺　大橋廸代　茂木和子
椎野美代子　波多野寿子

春の吟行会のご案内

【日　　時】 令和４年３月 26 日㈯
【会　　場】 高鼻コミュニティーセンター地下１階　大会議室（エレベーターなし）
埼玉県さいたま市大宮区高鼻町２－ 292 －１
電話　048-644-3360　FAX　048-644-3361
【受付開始】 10 時
【投句締切】 12 時（当季嘱目２句）
【開　　会】 13 時
【会　　費】 1,000 円（お弁当・お茶は各自で持参して下さい。）
＊懇親会は行いません。
【申し込み】 ３月４日～ 16 日まで。会費を添えて総務部宛にお申込み下さい。
【吟行場所】 大宮公園及び大宮公園周辺
＊地図は受付の際、お渡しします。
【アクセス】 JR 大宮駅（東口）より徒歩 20 分
バスは、運行本数がとても少ないため、お薦めできません。徒歩以外の方は、タクシーをお薦めいたします。
〇大勢の方の参加をお待ちしております。

主担当「りんどう俳句会」支援「事業部」



水明忌　中止のお知らせとご案内

２月26日に予定されておりました「水明忌」はコロナ感染症拡大のため、句会開催を中止し、誌上において「先師の忌を修す」ことと致したいと存じます。

［兼　題］　「鶯」もしくは「当季雑詠」にて１句

［投　句］　・200字詰原稿用紙（B5判）を使用
・氏名（俳名）と１句を楷書にて明記
・赤字にて「水明忌」と記入してください

［締　切］　２月25日（金）必着にて、発行所総務部宛に郵送してください

※参加費は無料となります。

事業部

一一〇〇号記念

作品募集

本年「五月号」が、水明創刊「一一〇〇号」に当たります。そこで五月号を「記念号」として、左記により作品を募集します。

ふるってご応募下さい。

兼　題　「水」「明」詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年・いずれも可）で一句ずつ

締　切　三月二十五日（発行所必着）

応募用紙は二月号に添付します。

風　声

○**角川「俳句」**十二月号――「合評鼎談」欄、「『俳句』十月号を読む」で堀田季何氏（楽園主宰）による山本主宰の「作品八句」の鑑賞

☆**山本鬼之介**（水明・面）**「うなじ」**

堀田　山本紫黄さんの弟様です。

昔、失われたものを惜しむというのが背景にあります。面白いところに目を付けられたと思いました。

　朧月ロケの木の橋いや長し

〈朧月〉に〈木の橋〉という古典的な情景だが、現代のロケの橋、しかも長い。俳諧味。

　襟首に刺青のをんな夏帽子

昔的なものと今的なものが合わさっている。

　息つぎの艶なる歌手よ秋さびし

「息つぎに艶のある歌手」なんて、もう消えて久しい。懐かしい。

〈息つぎ〉と言ったところがなかなかうまい。

○**現代俳句**十二月号――「百景共吟」欄

　白といふは花ではなけれ海碧し　　網野月を

　地に積もり海に融けゆく白きもの

　恋つて氷なんだ融けてなくなる

　お平らな海凸凹の空の色

　青くなるのか白一色か春眠忌

○**現代俳句**十二月号――「列島春秋―地区別現代俳句歳時記」欄

　月光を宿し氷柱の尖りたる　　越田栄子

○**現代俳句**十二月号――「現代俳句の風」欄

　火種にも灰神楽にも淑気満つ　　菊池ひろこ

　置火燵上は多趣味に塞がるる　　川島典虎

　飛石は着物の歩幅初しぐれ　　五明　昇

　故郷の陽と香を浮かべ冬至風呂　　近藤徹平

　花八手赤子のグーはいつ開く　　町野広子

　自販機の灯の明明と夜寒かな　　丸山マスミ

○**現代俳句**十二月号――「現代俳句の風―秀句を探る」欄

　海野良夫氏の感銘十句抄に

　飛石は着物の歩幅初しぐれ　　五明　昇

○**現代俳句**十二月号――「新入会員記念作品」欄

　天裂けて噴き出し響く瀑布かな　　秋谷信一

　風紋に辣韮匂ふ砂丘かな　　〃

　着陸や窓いつぱいの草の花　　小駒さち子

　枯葉舞ふライブに酔うて帰る道　　〃

○**草笛**（太田土男代表）十二月号――「受贈誌一詠」欄　　**鬼之介**

　九月閑日心身ともに再起動

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十二月号――「受贈俳誌美術館」欄

　今日のおすすめその一品に零余子飯　　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）十二月号――「受贈俳誌紹介」欄　　**鬼之介**

　九月閑日心身ともに再起動

○**太陽**（吉原文音主宰）十二月号――「受贈誌御礼」欄　　**鬼之介**

　新米供へ弥栄なれと屋敷林

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十二月号――「諸家近詠」欄　　**鬼之介**

　新米供へ弥栄なれと屋敷林

○**樹**（丹羽真一代表）十二月号――「他誌拝見」欄　　**鬼之介**

　長澤きよみ氏の鑑賞により

　賓頭盧の火照り鎮むる秋扇

「コロナ感染予防のため、撫でないでください」と注意書きがあり、撫でたい気持ちを抑え、苦笑いしてお賓頭盧を扇いでお参りされたのですね。残暑の厳しい日差しをまともに受けているお賓頭盧。その火照りは、コロナの世への怒りの象徴なのかもしれません。筆者も深大寺にて、同じように「撫でるな」とある撫仏に苦笑い致しました。「写生句の極意は矛盾の発見にあり、その矛盾が文学的面白さとなる。」という森田峠氏の箴言が、ある歳時記に記されていたのを、なるほどと改めて思い出しました。コロナの世ゆえの色々な矛盾した事実が、面白い俳句となり残りますね。

○**紫**（山崎十生主宰）十二月号――「他誌紹介」欄

宮澤順子氏による水明八月号の鑑賞

☆「水明」は、高浜虚子の高弟で、女性俳句の振興に尽力した女流俳人の草分けであった、長谷川かな女によって昭和五年に創刊された俳句雑誌で、間もなく九十周年を迎える。水明俳句会は、かな女以来四代の主宰を経て、平成三〇年に**山本鬼之介**氏が第五代主宰を継いでいらっしゃる。

◇祝歌　**山本鬼之介**

脇付のゆかしき文やさくらんぼ

止り木の気になる女黒ビール

夕焼ととことん語る独り旅

◇梅雨晴間　石山かつ子

あぢさゐの藍濃き波を二の鳥居

千段の階を来て玉の汗

梅雨晴や関東平野一望に

◇平林寺　境　延昭

どくだみの蜂起するかに雑木林

青葉風梢をわたる鳥の声

梅雨晴の武州の木立ひとり占め

◇山紫集　下川光子

葉桜のやさしき雨と出合ひけり

◇鼓笛集　塩野久子

つゆ晴れ間両手を空へ吐息かな

※私事だが、「水明」の前主宰の星野光二氏のカルチャー教室へ見学に行ったことがある。運命は不思議だ。

（日髙道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和三年十二月三十一日現在―

加藤イツ子　10口
大塚茂子　10口
小林京子　3口
日髙道を　5口
飯室夏江　5口
匿名　6口
小駒さち子　10口
笹本啓子　3口
河原叔子　10口
森　千代子　10口
越田栄子　6口
原田秀子　5口
武田重子　6口
網野月を　100口
菊池ひろこ　10口
鈴木康世　10口
渋谷きいち　3口
矢作水尾　10口

―合計222口―

後記

年が改まり、新型コロナの感染者数が急激に減少し、やっと終りが見えたのかなと、ほっとしました。しかし、それも束の間でした。世界を席巻しているオミクロン株が日本にも上陸し、あっという間に、今までにない患者数に拡大してしまいました。

オミクロン株は重症にはならないと言われますが、感染力が非常に強いとかで、大人も子供もびくびくして暮す日々です。

水明でも、昨年から色々な会を企画してはあえなく、中止や延期となってしまいました。そんな中、水明五月号が水明一一〇〇号になります。コロナ下で色々なイベントがままなりません。そこで会員の皆様に「水」「明」の二句を作句して頂き、水明の永い歴史を寿ぎたいと思います。水明誌の発行が、一年十二冊として、一一〇〇号とは如何に長いか、気の遠くなる長さです。

尚、「水」「明」の二句は、一一〇〇号を寿ぐ、お祝の句です。ですから、主宰の選句は無くて、五十音順に皆様の二句が掲載される予定です。

本号の「水」「明」の応募のご案内をご覧の上、誌友、会員にかかわらず、ご参加下さい。

尚、本号の巻末に応募用紙を添付していますので、これを用いてご応募下さい。

今年の冬は、新型コロナの上に、何年振りかの寒さと大雪に、びっくりしました。やっと立春、ほっとしました。日が長くなり、特に夕方の日が伸びて、帰宅の時に明るいのはいいですね。

ところで、三回目のワクチン接種が始まりました。これで少しでも、オミクロン株の拡大が収まり、平凡な日々が戻るよう、水明の会で皆様にお会出来ますよう願っています。皆様にはどうぞお気をつけて……。

（節代）

今月のはてな?

朝熊竜胆（あさまりんどう）
補陀落渡海（ふだらくとかい）
鮫（いさざ）
寠（やつ）れ
角打（かくう）ち
嚔（くしゃみ）
託（かこつ）ける
元和（げんな）
白底翳（しろそこひ）
大呂（たいりょ）
綛（かせ）

86 82 74 72 60 47 39 38 20 13 7 頁

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：12時半～午後4時半
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和四年二月号
通巻一〇九七号
令和四年二月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048－886－六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048－822－四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇－〇－一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

きりとりせん

一一〇〇号記念作品　三月二十五日締切

氏名（俳号）・ふりがな

「水」詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年・いずれも可）で一句

「明」詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年・いずれも可）で一句

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音 雪月花

四月号 二月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

五月号　二月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

五月号　二月二十五日締切

二月の兼題　「梅」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

氏名（俳号）

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

生きて世の修羅に躓き冬木立　吉住光弥
その絮を両の手に取り枯芙蓉　網野月を
迷ひ込む花見小路や酉の市　石井喜恵
紐育まで地球儀廻し冬うらら　石山かつ子
目を凝らす鷹や補陀落渡海船　大橋廸代
冬木立何処ともなくオラトリオ　大村節代
葛湯とく太初の闇を照らす如　大場順子
闘志まだ少し残りて初句会　鳥羽和風
年頭（としがしら）からと推されて柚子の風呂　松井由紀子
白菜積む轍の深き畑の中　井上燈女
霜柱神の庭掃く緋の袴　丸山マスミ
束の間の逢瀬のやうな冬夕焼　梅澤佐江
文化の日平積みゴルゴサーティーン　近藤徹平
中庭に香る花枇杷尼僧院　正木萬蝶
木の葉雨鐘の余韻のうらおもて　大塚茂子
菊懸崖その傾きに語りかけ　中野彊
洋館の灯に和色あり冬の暮　宮崎紫水
しみじみと並ぶ卵塔冬日差　井上玲子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

編棒の先が対話の文化の日　神田治江
手と眉に秋思あふるるフラメンコ　曲淵徹雄
きつちりと干し物畳む菊日和　本橋稀香
水分神は川路を神の旅　丸屋詠子
掛茶屋に女人の杖や冬紅葉　横山君夫
敬老日訛ほどよきおけさ節　保坂翔太
凩の電線唸る無人駅　染谷正信
空つ風字の消えたる吾が故郷　反町修
女子会や見下ろす街の片時雨　橋本京子
茶の花や農家カフェへと誘ふ道　渋谷きいち
冬の早朝飛翔の鳥に意気高く　西幅公子
しぐるるや汽笛遠のくトラス橋　村杉清吉
掃除ロボに猫が飛び乗る文化の日　笹本啓子
小夜更けて落葉の音を聴く欅　鈴木和子
ソリストの愛しき笑顔文化の日　原田秀子
足早に暮るる山の端冬桜　越田栄子
早暁の凍雲の海夢捨てず　梅澤輝翠
小春日や芝生に並ぶ豆画伯　新暦文

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和四年二月一日発行　毎月一日発行
（第九十五巻　第二号）　定価　一〇〇〇円